備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書

亀　田　修　一

―論　文　要　旨―

備前邑久窯跡群は岡山県南東部に位置する須恵器窯跡群である。約130基の窯跡が確認されているが，発掘調査された窯跡は12基しかない。そのため須恵器に関する研究は十分なされていない。ただ，近年少ないながらも発掘調査が進み，その実体の一部が徐々に明らかになり始めている。

小稿は，不十分ながらもこれらの発掘調査の成果をもとに邑久窯跡群の須恵器甕を検討した。検討対象は，甕の口縁部形態，法量，当て具文様である。

口縁部形態においては，日本列島の須恵器生産の中心である陶邑窯跡群と６世紀中頃まではある程度類似しているようであるが，８世紀の「コの字形」口縁甕は同時期の陶邑窯跡群には類例がないようである。周辺の他地域の類例検索は十分ではないが，やはりよくわからない。当時の吉備地域の地域的特徴かもしれない。もしこれが確認できれば，甕の流通に関して，口縁部形態で検討できる可能性が出てくる。

また，櫛描き波状文などの頸部文様に関しては，「コの字形」口縁甕には施文されていないようで，文様と口縁部形態の関係も検討材料となり，工房内のあり方なども推測できるかもしれない。

口径の大きさに関しては，16～25cmのものが最も多く生産され，30cm前後，40cm前後の小グループがあり，そして50cm前後以上のものに一つのグループがあるようである。佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡などの８世紀代の口径50cm前後以上のものに関しては，筑前牛頸窯跡群の研究成果によれば，「大瓶」（大甕）と考えられ，奈良時代最大規模の佐山東山窯跡の窯構造との関わりも含め，当時の大甕生産体制を考える良好な資料となりそうである。

甕類の内面当て具文様に関しては，細かな比較研究はできていないが，少なくとも50種以上の車輪文，楕円形文，そして特殊な扇形文，放射状文などがあり，この多様性は日本列島のなかでもトップクラスと推測される。なぜこのように種類が豊富なのかはわからないが，一つの個性であることは言えよう。また，８世紀代の佐山新池１号窯跡などにおいて無文当て具の痕跡を残すものがある。当時の日本列島ではまれな例であり，朝鮮半島からの新たな技術導入の可能性もあり，多孔甑などとあわせて検討することで，より深い研究ができると思われる。

キーワード：備前，邑久窯跡群，須恵器，窯跡，流通，甕，口径，当て具文様

１．はじめに

備前邑久窯跡群は岡山県南東部に位置する須恵器窯跡群である。約130基の窯跡が確認されているが，発掘調査された窯跡は12基しかない。そのため須恵器研究は基本的に採集資料によってなされてきた[1]。

ただ，近年少ないながらも発掘調査が進み，その実体の一部が徐々に明らかになり始めた。

小稿はいまだ不十分ながらもこれらの発掘調査の成果をもとに邑久窯跡群の須恵器甕を検討してみたい。一般的に須恵器研究では杯類が主な対象となるが，小稿ではあえて甕を対象としたい。編年の基礎資料としては変化が乏しく，杯類には及ばないが，集落・古墳などの消費遺跡では比較的出土し，生産と流通の関係を調べるうえで一定の役割をもつと考えるからである。

対象資料は，上記のように発掘調査資料を基本的に扱うが，一部採集資料も補助的に扱うこととする。そして検討対象は，甕の口縁部形態，法量，当て具文様とする。

邑久窯跡群の研究は註１にあげたものが代表的であるが，甕に注目したものは基本的にみられない。内面の当て具文様に関しては，池田浩1998「車輪文当て具痕のある須恵器」で車輪文が集成され，馬場昌一2009「３　楕円形当て具痕」で，楕円形当て具痕が集成・検討されている。小稿は筆者らが発掘調査した佐山新池１号窯跡，佐山東山窯跡群（亀田ほか2014～2018）などの成果をあわせ，検討を進めたいと考えている。

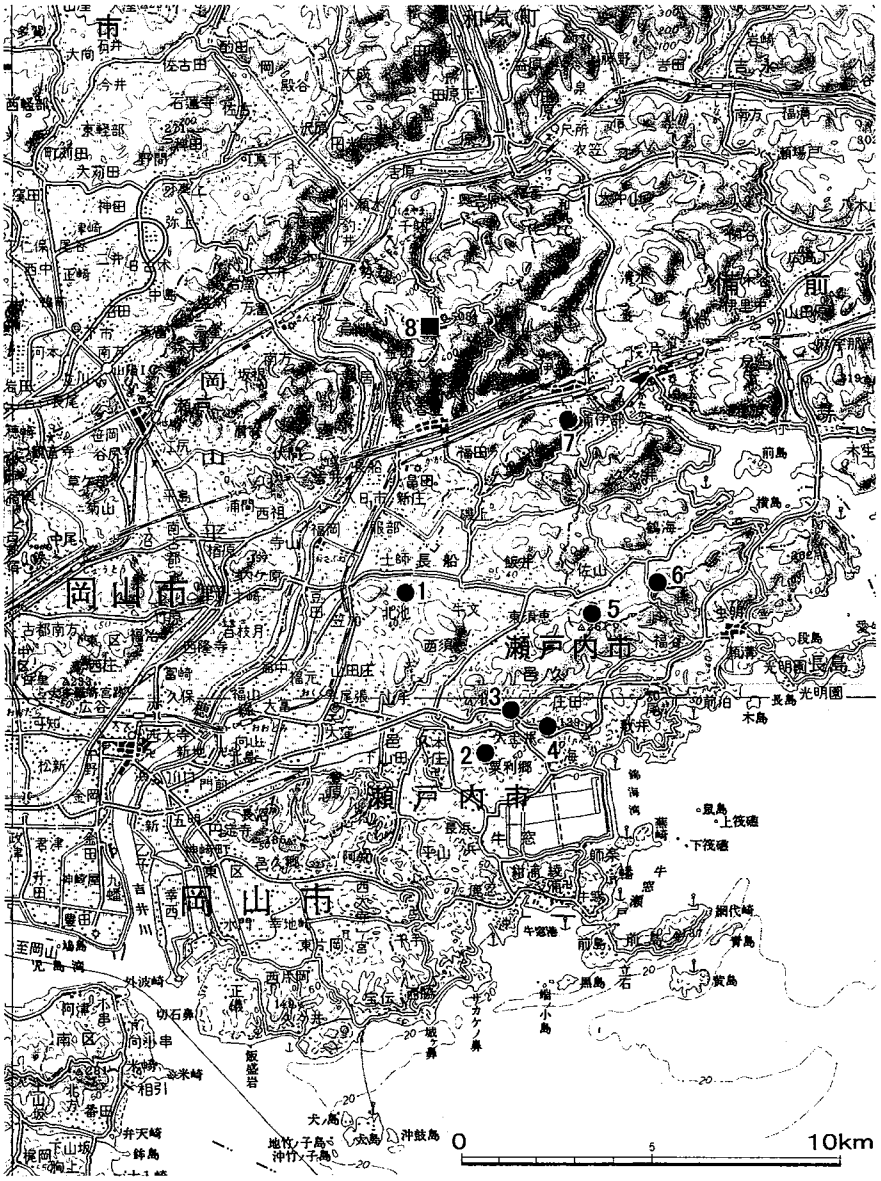

図１　関連遺跡位置図（1/200,000）

１：木鍋山窯跡　２：寒風窯跡群　３：新林（宮嶺）窯跡　４：奥更谷窯跡
５：佐山新池１号窯跡　６：佐山東山窯跡群　７：東６号窯跡　８：熊山遺跡

２．資料

（１）木鍋山窯跡（図２）

瀬戸内市長船町に位置し，1979～1981年に断続的に町営グランド建設に伴って発掘調査された（江見1998）。

６世紀中葉前後のもので，邑久窯跡群では最古の窯と考えられている。正式報告書は刊行されておらず，杯類，一段透かし穴高杯，壺甕類が報告されている。

壺甕類の口縁部形態は断面が三角形，コの字形のものがある。頸部外面に文様はないようである。口径は約11cm，24cm（７，８）[2]のものがある。叩き・当て具文様などは不明である。

（２）寒風窯跡群（図２：１号窯跡，図３：２，３号窯跡，竪穴遺構３）

瀬戸内市牛窓町に位置する。古く1929年に時實黙水が１号窯跡の灰原を発掘調査し，1978年，「寒風陶芸の里」構想に関連して，寒風古窯址群緊急調査委員会が磁気探査，一部発掘調査を行った（山磨1978）。そして2005～2008年に牛窓町教育委員会が

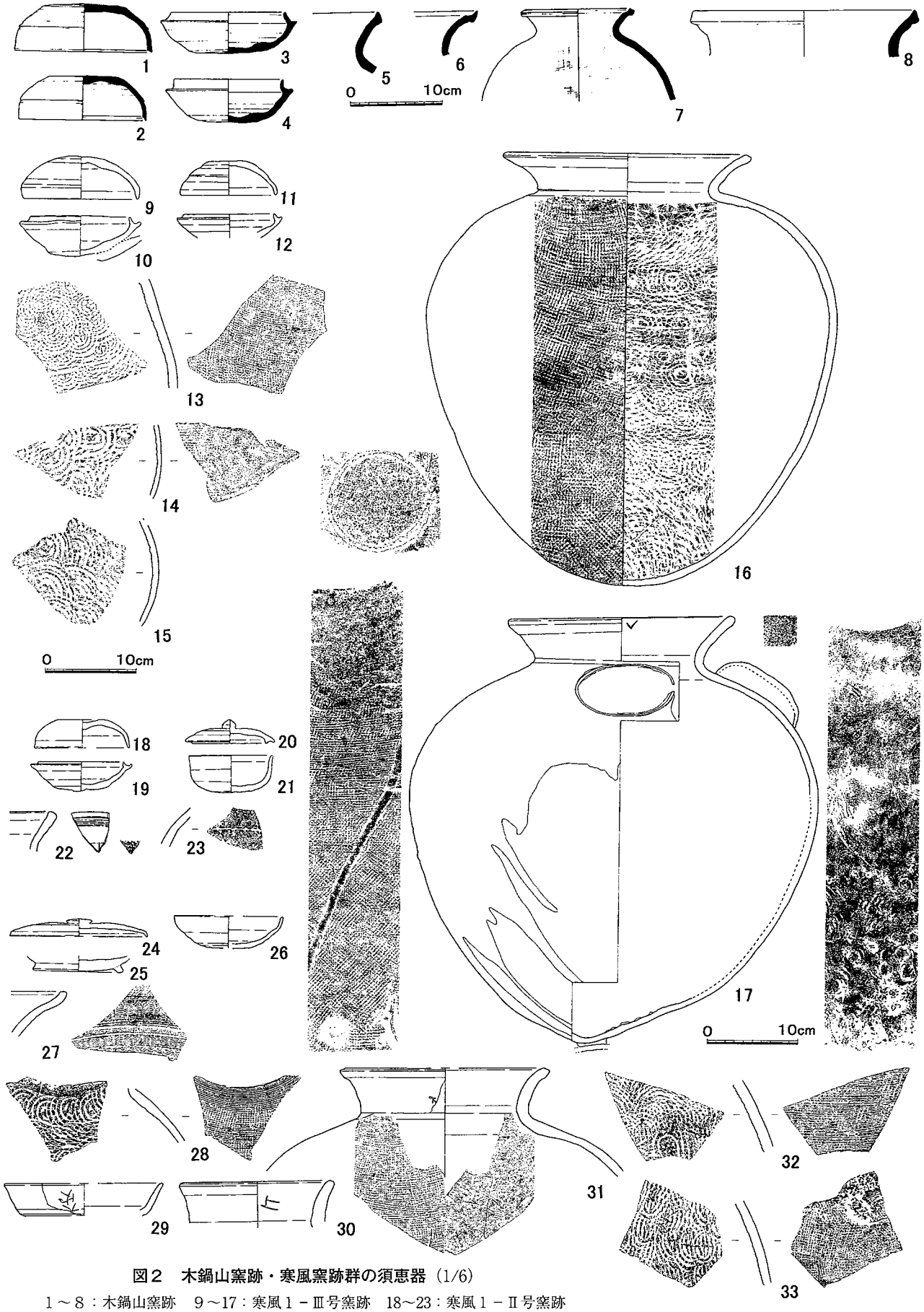

図２　木鍋山窯跡・寒風窯跡群の須恵器（1/6）

１～８：木鍋山窯跡　９～17：寒風１－Ⅲ号窯跡　18～23：寒風１－Ⅱ号窯跡
24～31：寒風１－Ⅰ号窯跡　32・33：寒風１号窯跡灰原

史跡整備に伴って発掘調査した（馬場ほか2009）。

これらの調査によって，７世紀初め頃から８世紀初め頃の窯跡が合計５基あることが確認された。それぞれの窯跡の時期は１－Ⅲ号窯跡：７世紀初～前半，１－Ⅱ号窯跡：７世紀前半～中葉，２号窯跡：７世紀中葉～末，１－Ⅰ号窯跡：７世紀末～８世紀初，３号窯跡：７世紀末～８世紀初と考えられている。以下，馬場ほか2009の報告書の成果によりながら説明する。

１－Ⅲ号窯跡　寒風窯跡群では最古と考えられているもので，７世紀初から前半の窯跡と考えられている。古墳時代以来の杯身の口径が10～12cmの杯類（杯Ｈ），高杯，壺甕類のほか上層土坑１で次に述べる完形品の甕とともに陶棺が出土している。

甕類は窯跡上層土坑１から完形品が２点出土した。口径24cm，胴部最大径45cm（16）と口径26cm，胴部最大径45cm（17）のほぼ同じ大きさのものである。口縁部形態はどちらも頸部の厚さをもったまま口縁端部に至り，前者はやや斜め気味に平坦面を作り，後者はやや丸みをもって終わる。外面の叩き文様は木目に直交する平行文，内面の当て具文様は一般的な同心円文であるが，後者はそれをナデ消した痕跡がみられる。

ほかの甕の破片は，基本的には外面の叩き文様は木目に直交する平行文で，内面の当て具文様は同心円文であるが，星形（？）や十字文などの広義の車輪文（13～15）が３種類はあるようである。

１－Ⅱ号窯跡　１－Ⅲ号窯跡の北側約５ｍの場所に並んで位置する。１－Ⅲ号窯跡に次いで，７世紀前半～中葉頃に造営・操業されたと考えられている。古墳時代以来の杯身の口径が９～10cmの杯類（杯Ｈ），これらより小型でつまみ付き・かえりありの蓋と平底身の杯類（杯Ｇ），高杯，壺蓋のほか甕の小破片がわずかに出土している。上層から中空円面硯の鳥形把手が出土している。須恵器のほかには鴟尾と陶棺が上層で出土している。

甕は小破片のみであるが，22の口縁部は端部側に向かってやや厚みを増し，丸みをもった面をもつ。外面に文様はない。23は，口縁端部はないが，外面に櫛描き波状文が２段沈線を挟んで施されている。もう１点は胴部片で外面は平行叩きの上にカキ目，内面の当て具文様は一般的な同心円文である。

１－Ⅰ号窯跡　１－Ⅱ号窯跡の北側約６ｍの場所に並んで位置する。７世紀末～８世紀初の口径約15cmのつまみ付・折り曲げ口縁の杯蓋，やや踏ん張り気味の高台付の杯（杯Ｂ），高杯，壺甕類と円面硯，鴟尾片が焼成部で出土し，焚き口部で鴟尾片と陶棺片が出土している。また灰原で「大皮」ヘラ書き杯蓋・杯身（29），「上」「下」ヘラ書き甕（30，31）などが出土している。

上記の「上」「下」ヘラ書き甕の口縁部は，ゆるやかに外反しながら伸び，口縁端部でそのまま丸く終わるもの（「上」30）と，わずかに厚みをもち，コの字に近いもの（「下」31）がある。後者の外面の叩き文様は木目に直交する平行文で，内面は無文の当て具か同心円文スリ消しと考えられている。前者の口径は16cm，後者の口径は22cmである。このほか，頸部の厚みがそのまま伸び，端部近くでわずかに内傾する口縁部のものの外面に２段の櫛描き波状文が沈線とともに描かれたもの（27）がある。図示していない直立口縁気味のものの口径は20.4cmである。

そして焼成部・灰原出土の甕片の当て具文様に車輪文（28），楕円形文（２種，32，33）を施したものがみられる。楕円形文の１種（32）は内側に格子目文がある。

２号窯跡　１号窯跡（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の南東約80ｍ離れて単独で確認されている。報告書に図示されたものとして，７世紀中葉～８世紀初の杯Ｇの蓋と身が少々，杯Ｈの蓋と身が上下逆転し，本来蓋であったものが身として使用されたもの，杯Ｂの蓋が窯体内・前庭部からまとまって出土している。杯Ｂの身である高台付は出土していない[3]。そのほか高杯，壺甕類が出土している。

灰原でもこの器種構成は基本的に変わらず，小型直口壺（短頸壺），円面硯が増加し，甑の口縁部と推測されるものが出土している。この時期まで甑が残るのであろうか。ただ，窯体内と同じく，杯Ｂの身である高台付の杯身は出土していない。この窯では生産しなかったのであろうか。また上層のゴミ穴から面取した長さ５cmほどの四角柱状製品が出土しており，陶馬の脚部の可能性が推測されている。

甕の口縁部がわかるものは，前庭部出土品１点，灰原出土品３点が図示されている（７～10）。基本的に口縁部は頸部と同じ厚さのもの，わずかに肥厚するものの２種で，口縁端部は丸く収めるものと，丸く収めながら面をもつものである。大きさは，頸部が直線的に伸びるもの（７）は口径19cm，そのほか（８～10）は16，19，20cmである。頸部の装飾に関しては，直線気味に伸びるものの頸部に沈線をめぐらすものはあるが，ほかは無文である。外面の叩き文様は木目に直交する平行文，内面は基本的に同心円文であるが，その同心円文にキズが入ったもの，文様があまりよくみえないものがある。そして「星形文」（７）と「十字文」（12，13）の車輪文が各１種ずつと楕円形文（14）が１種確認できる。

３号窯跡　２号窯跡の南東約60ｍ離れて道路際に単独で確認されている。報告書に図示されたものは杯Ｂの蓋と身，甕の胴部破片である。蓋は基本的に口縁端部を折り曲げたものであるが，１点かえりをもつものがある。７世紀末～８世紀初頃と考えられている。

甕は胴部破片のみであるが，外面は基本的に木目に直交する平行文，内面の当て具文様は同心円文である。１点６本の軸線をもつ車輪文（18）がみられる。

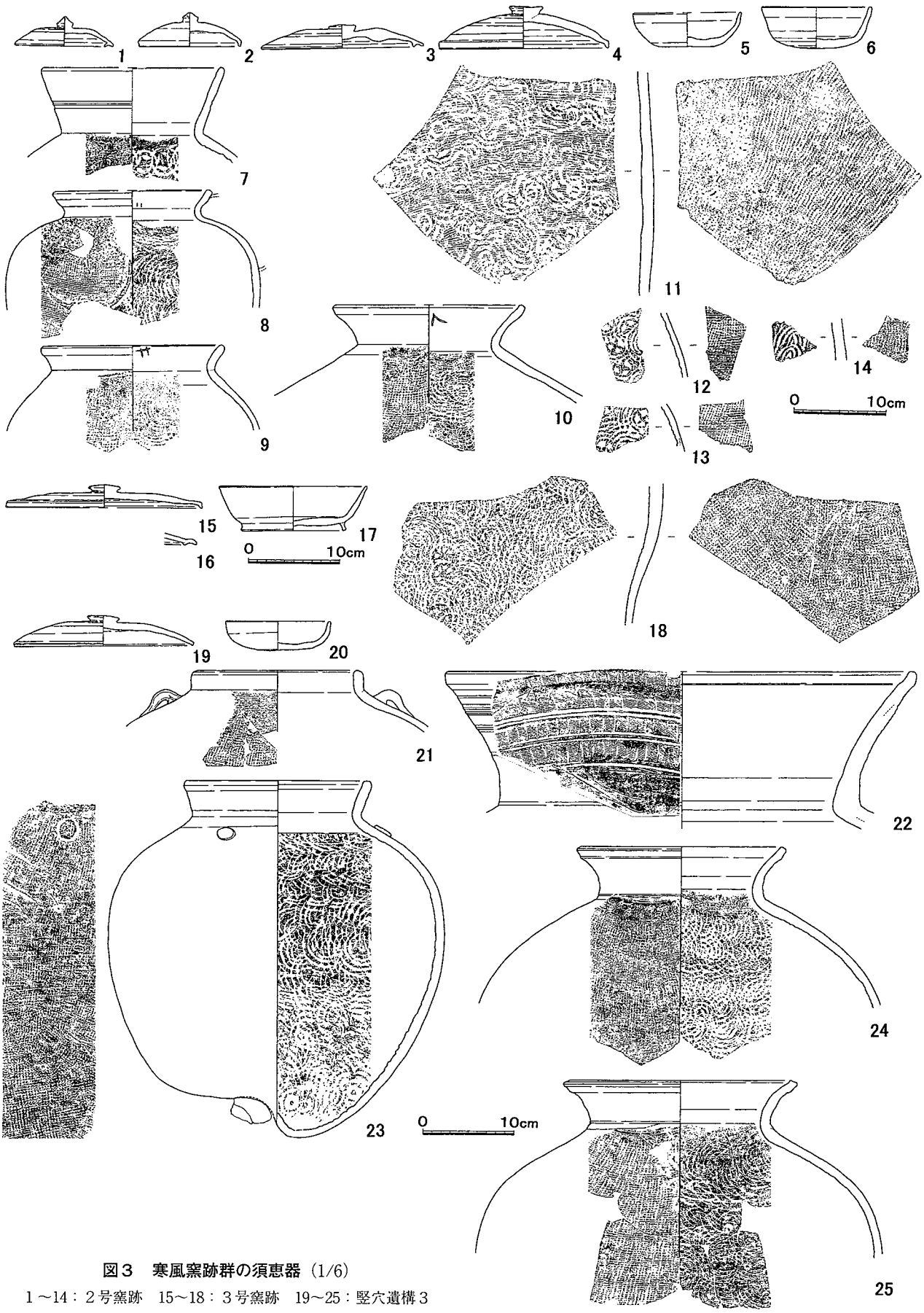

図３　寒風窯跡群の須恵器（1/6）

１～14：２号窯跡　15～18：３号窯跡　19～25：竪穴遺構３

この寒風窯跡群では工房の可能性が推測される竪穴遺構３が１号窯跡の南西約60m地点で確認されている。７世紀末～８世紀初め頃の杯類，平瓶，長頸壺などとともに甕類が図示されている。

21は短頸・直口のもので，肩部に２個把手を付けている。口縁端部は丸く収めている。外面の叩き文様は木目に直交する平行文で，内面は当て具痕跡をすり消しているとされている。ほかの４点はいずれもくの字形のもので，23は頸部を直線的に伸ばし，端部を丸く収めている。24，25はゆるく外反しながら口縁端部をやや肥厚させ，側面と上面に幅１cm前後の面をもつ。25はさらに口唇部内面をわずかにつまみ出している。後述する佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡の「コの字形」口縁に類似している。そしてもう１点（22）は頸部を直線的に伸ばし，口縁端部付近をやや尖らせ気味にし，この口縁端部を含め，櫛描き波状文を４段飾り，下３段の下には沈線をめぐらせている。

これらの甕の大きさは，21が口径17cm，23は口径19cm，胴部最大径36cm，24，25の口径は22cmと24cm，頸部に波状文を飾る22の口径は50cmと大型である。

（３）新林（宮嶺）窯跡（図４）

瀬戸内市邑久町に位置し，1973年に東備西播有料道路建設に伴って発掘調査された（伊藤1974，亀田2006b）。７世紀前半～８世紀前半の時期で，須恵器のほか，陶棺や鴟尾も出土している。須恵器の器種は古墳時代以来の杯類（杯Ｈ），つまみ・かえりを有する小型の杯類（杯Ｇ），そして７世紀末～８世紀の杯類（杯Ｂ），高杯，平瓶，大型の把手付平鉢のほか大小の壺甕類などが出土している。

甕の口縁部は，頸部の厚みをそのまま口縁部まで伸ばし，端部に平坦面をもつもの（22，26），口縁部外面をやや肥厚させるもの（27，31），端部がやや丸みをもち内側にわずかにつまんだようなもの（20），端部を内外に肥厚させ丸みをもつもの（19）などがある。頸部を直線的に伸ばし，そのままの厚さのもの，やや肥厚させたもので口縁端部に面をもつものに櫛描き波状文を施したものがみられる（31～33，亀田2006ｂ）。甕の口径は直径16～26cmのものと約30～40cmの中型ものが図示されている。外面の叩き文様は木目に直交する平行文，内面の当て具文様は一般的な同心円文である。

なお，この窯跡で出土している鴟尾（34）に関しては，類似するものが大阪市細工谷遺跡（35，岡村ほか1999）で出土しており，胎土分析の結果からもこの窯とまでは断定できないが，邑久窯跡群から運ばれたと考えても問題ないことが指摘されている（白石2001）。

（４）佐山新池１号窯跡（図５～７）

備前市佐山に位置する。2010～2012年，日本学術振興会科学研究費補助金で，岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した（亀田ほか2014）。この１号窯跡のほかにも窯跡が存在する可能性はあるが，確認できていない。

８世紀後半を中心とする時期の窯跡である。少なくとも１回の造り直しが確認できている。

遺物は，杯類（杯Ｂ，杯Ａ，杯Ｈの蓋が身になったもの），皿，盤，高杯，鉢，こね鉢，平瓶，多孔甑，短頸壺，長頸壺，甕など多様な器種の須恵器が出土している。このほか手づくねミニチュア土器，瓦塔（小型陶棺？），一枚作り平瓦なども出土している。甕には「大」をヘラ書きしたものが１点（32）出土している。

甕は大量に出土している。口縁部形態はゆるやかに外反し，端部を肥厚させ，上面と側面に幅１cm前後の平坦面を作った，断面「コの字形」口縁が多くみられる（５－24，28など）。この「コの字形」口縁は上面の平坦部を内側に少しつまみ出したようなものとこのつまみ出しがないものがあるが，前者が多いようである。またこの「コの字形」口縁は口径の大きさに関わらずみられる。

このほか，口縁端部が基本的に肥厚せず，またはわずかに肥厚してそのまま平坦面を作るもの（５－26など），やや丸みをもって終わるもの（６－５），口縁端部を外側に少し折り曲げるもの（５－23，25），断面三角形のもの（５－22）などがわずかずつある。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

甕の口径は，20cm前後，30cm前後，40cm前後，50cm前後のものがあるが，大きくは20～30cmの小型と50cm前後の大型のものに二分できそうである。その間にもう一グループある可能性はあるが，現時点ではよくわからない。

外面の叩き文様（図６－10，11，図７）は，木目に直交する平行文が基本であるが，一部木目に平行する平行文も使用されているようである。内面の当て具文様には一般的な同心円文がほとんどであるが，キズが入った同心円文が少々みられ，それら以外に，十字文（７－１～12など）が６種以上，六車輪文（７－15，16など）が２種以上，星形文（７－13），扇形文（７－23），放射状文（７－25～27），格子文（７－24），平行文（７－22），そして無文（７－21，１点のみ？）がみられる。平行文は木目に直交する平行文，木目がはっきりしない平行文（木製，陶製？）もある。このほか平行文と同心円文（６－10），平行文と十字形車輪文（６－11）を一緒に使用したものもある。

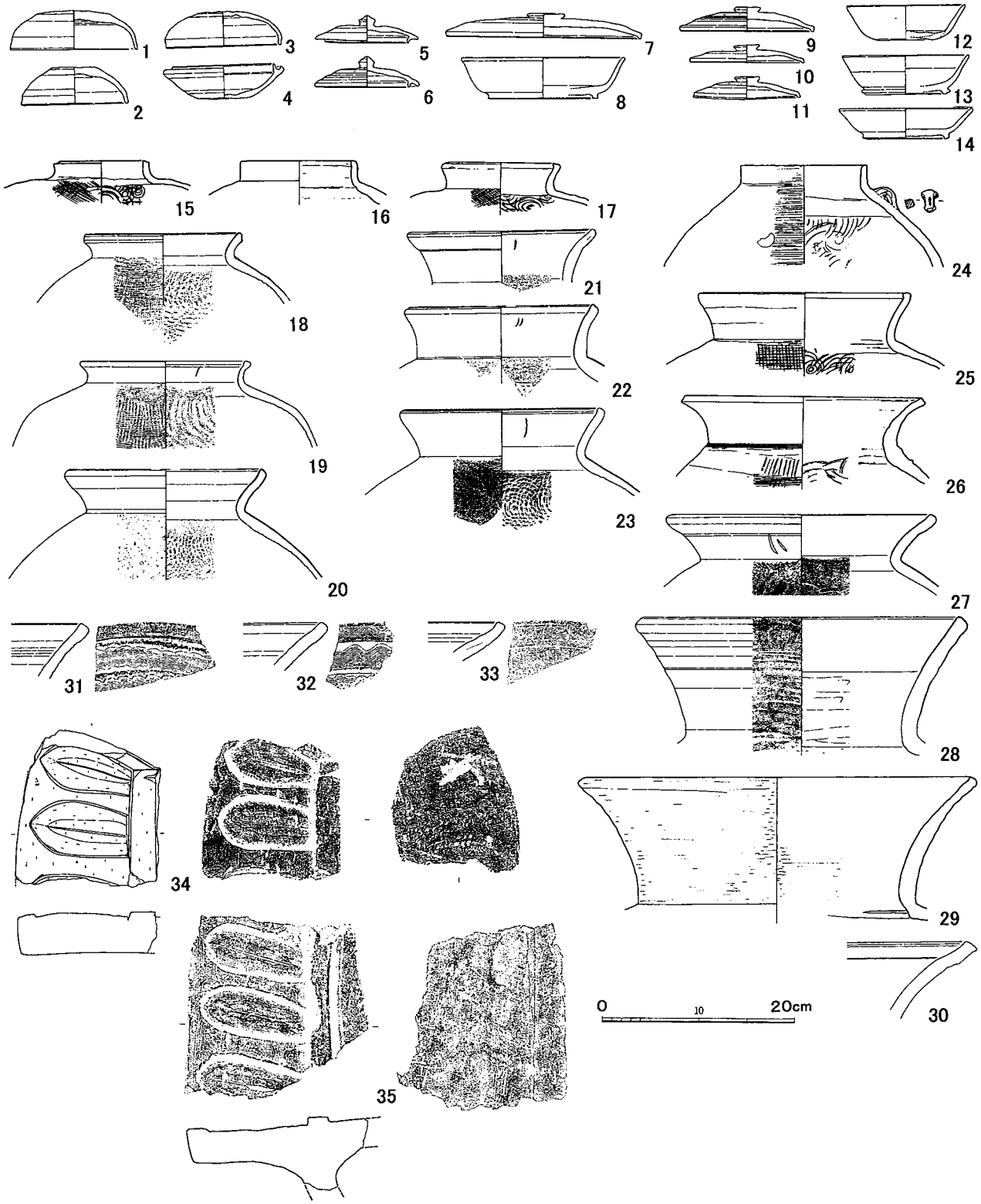

図４　新林（宮嶺）窯跡の須恵器・鴟尾と関連資料（1/6）

1～34：新林（宮嶺）窯跡　35：摂津細工谷遺跡

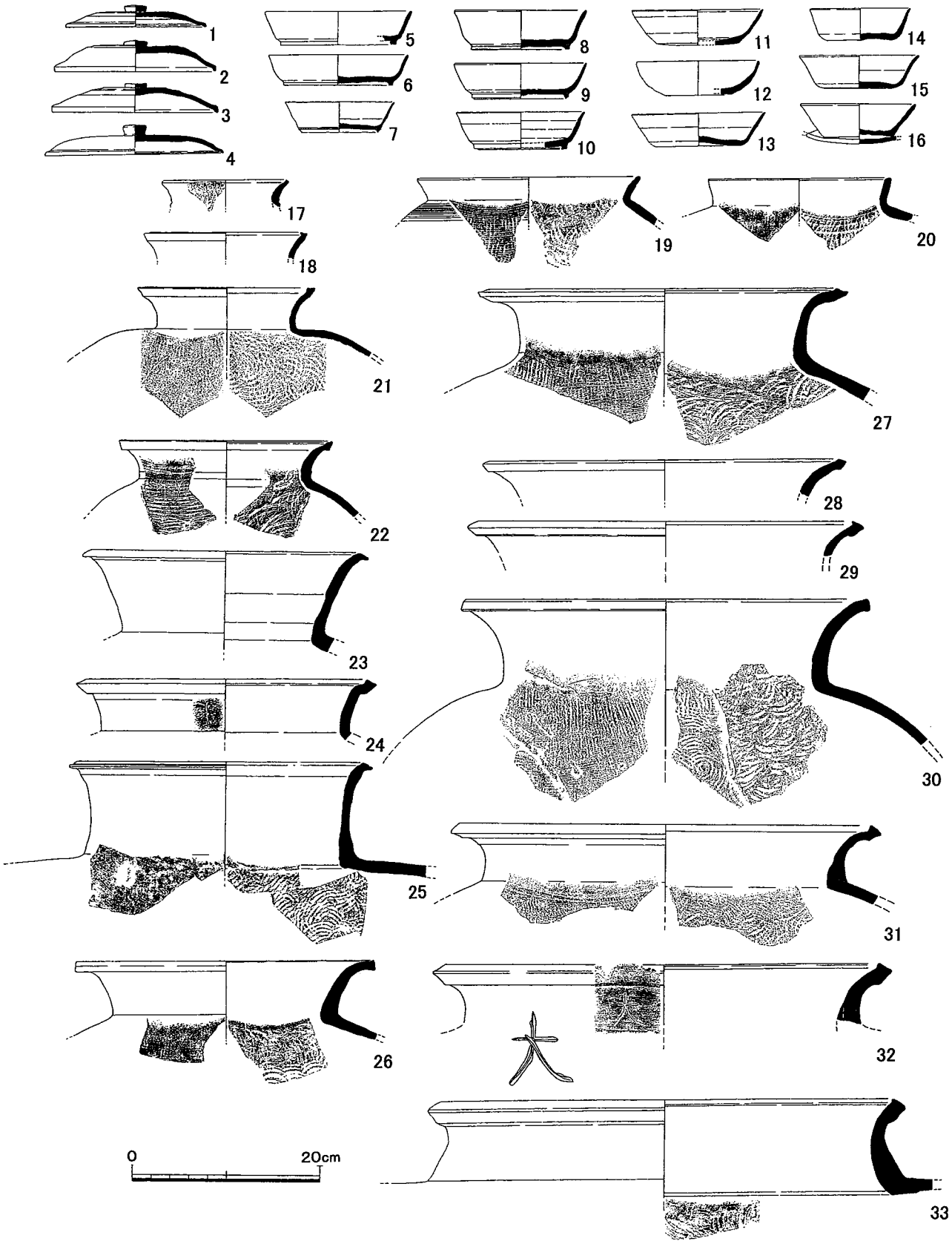

図５　佐山新池１号窯跡の須恵器（１）（1/6，32「大」トレースのみ1/3）

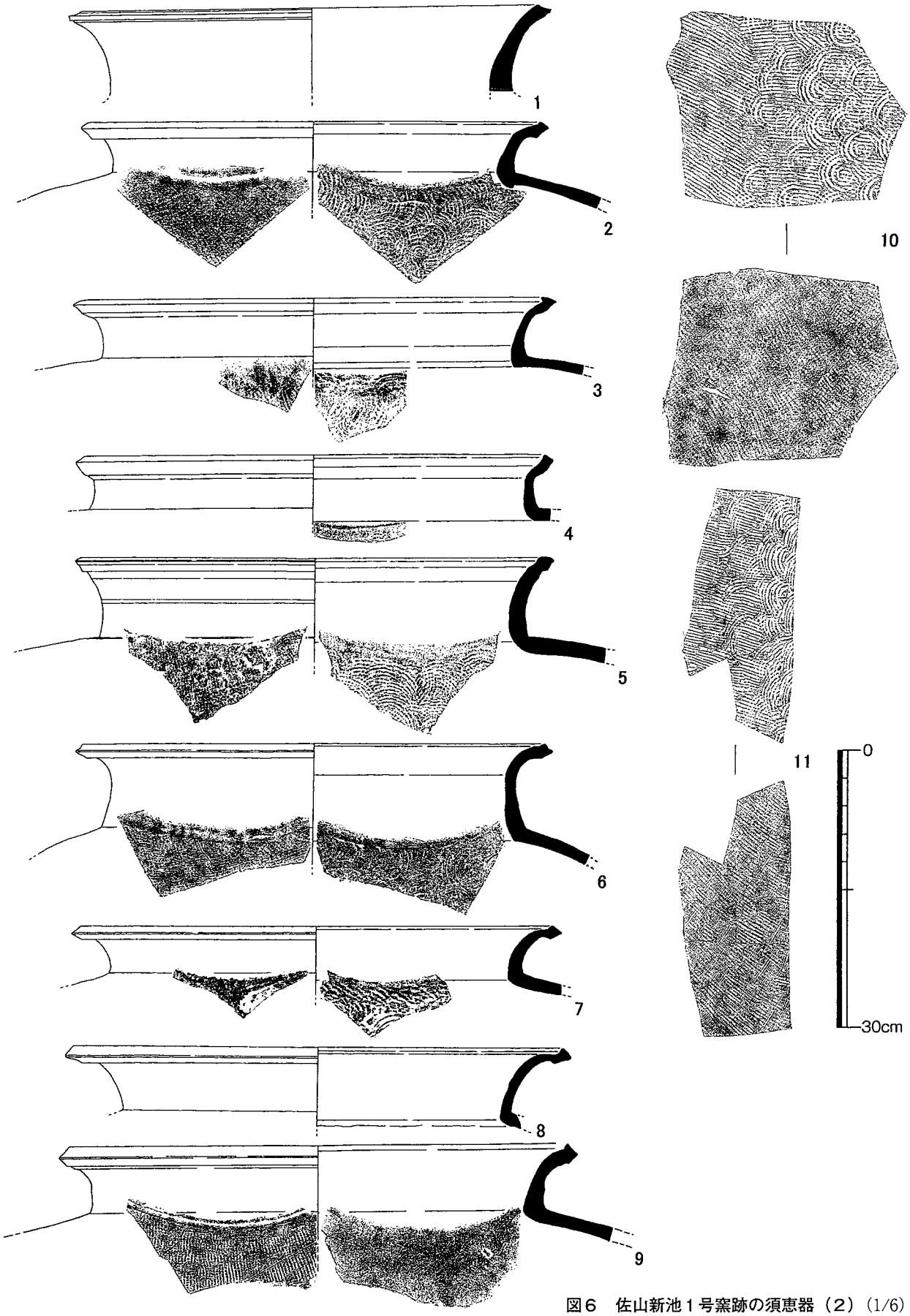

図６　佐山新池１号窯跡の須恵器（２）（1/6）

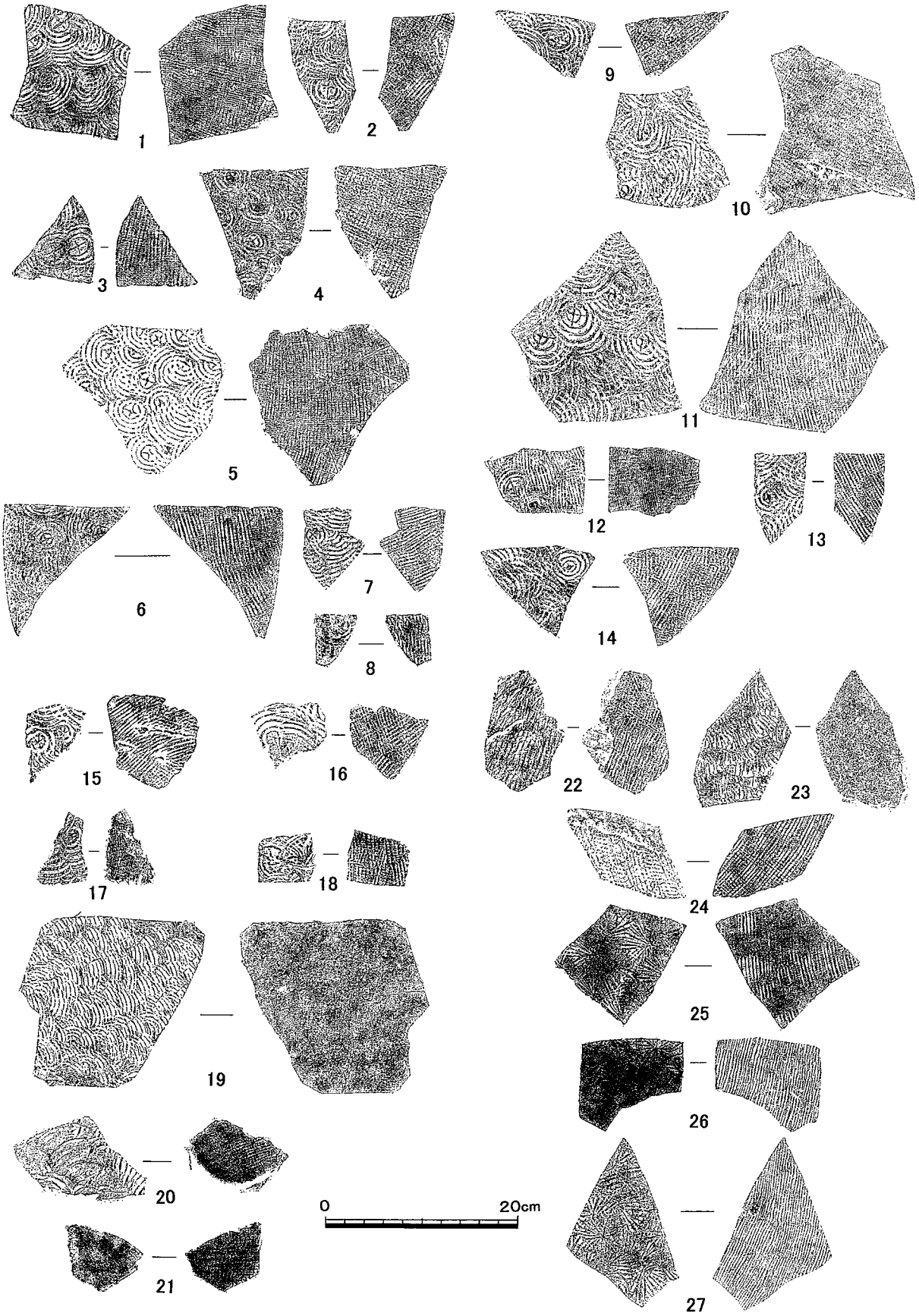

図7　佐山新池1号窯跡の須恵器当て具文様（1/6）

（5）佐山東山窯跡群

備前市佐山に位置する。前述の佐山新池１号窯跡が佐山盆地の西端に位置するのに対して，この佐山東山窯跡群は東端に位置する。約1.6km離れている。2010～2012年の佐山新池１号窯跡の発掘調査終了後，日本学術振興会科学研究費補助金（2012～2013年，2017年），（公財）ウエスコ学術振興財団学術研究費補助事業（2014年），岡山理科大学プロジェクト研究推進事業（2016～2017年）などの補助を得て，岡山理科大学考古学研究室が発掘調査した（亀田ほか2014～2018）。

窯跡は２基確認し，山裾側にある佐山東山窯跡が８世紀中葉～後半を中心とする時期のもので，斜面をやや上に登ったところにある佐山東山奥窯跡は10世紀頃のものと考えている。

佐山東山窯跡（図８，９）　全長は斜距離で17.21m，水平距離で16.02mあり，奈良時代の須恵器窯としては現時点で日本列島最大の規模のようである。窯上部で少なくとも２回の造り直しが確認できている。

遺物は，杯類（杯Ｂ，杯Ａ，杯Ｈの蓋が身になったもの，金属器模倣杯），皿，高杯，鉢，鉄鉢形鉢，こね鉢，平瓶，多孔甑，短頸壺，長頸壺，甕，風字硯など多様な器種の須恵器が出土している。このほか土師器を須恵器窯で焼いたと推測される甑，甕，移動式カマドなども出土している（亀田2017）。さらに，10世紀頃の須恵器椀・小皿などが少量出土しており，最後の造り直しの窯で焼かれた可能性も考えられる。

また，「福」押印須恵器椀，「葛原小玉女」ヘラ書き須恵器壺，「□□十六年」ヘラ書き銘文塼など貴重な文字資料が出土している。

甕類は，多少幅はあるが，前述の佐山新池１号窯跡出土例と類似した「コの字形」口縁甕がやはり多くみられる（図８－39～41，９－１，５，７，８，11，12など）。そのほか，ゆるやかに外反し，あまり肥厚せず，口縁端部に平坦面をもつもの（８－31，32など），端部側のみ内外に肥厚させ，平坦部をもつもの（８－34など）がややみられ，二重口縁風に段を作るもの（８－33）もわずかに出土している。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

甕の口径は，図示されたものでは20～30cmが15点と最も多く，次いで30～40cmが４点，そして50cmを越えるものが２点あった。20～30cmの小型，30～40cmの中型，そして50cmを越える大型の３グループに分けることができそうである。

外面の叩き文様は，木目に直交する平行文が基本であるが，一部木目に平行する平行文も使用されている。内面の当て具文様には一般的な同心円文がほとんどであるが，キズが入った同心円文が少々みられ，それら以外に，十字文（９－14）と楕円形文（９－13）が出土している。楕円形文に関しては，出土トレンチが少し離れており，別の窯跡の存在を示している可能性もある。

佐山東山奥窯跡（図10）　佐山東山窯跡の東奥100mほど登ったところに位置している。窯跡は斜距離で5.05m，水平距離で4.50mあり，10世紀の須恵器窯である。椀を焼成した須恵器窯としては，邑久窯跡群では現時点で最古のもので，備前焼のルーツとなる可能性があると考えている。

遺物は，平底杯，輪高台杯，輪高台椀，平高台椀，小皿，鉢，耳付壺，甕，風字硯などが出土している。底部切り離し技法にはヘラ切りと回転糸切りの両者がみられる。このほか糸切り椀をのせた焼台，土師器を須恵器窯で焼いたと推測される甕も出土している。

甕類は，基本的に口縁部をくの字形に折り曲げ，口縁端部内側（５），または内外面を少し肥厚させ，面をなすようにしたもの（６）がある。佐山東山窯跡や佐山新池１号窯跡に多くみられた「コの字形」口縁甕はない。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

甕の口径は，図示されたものでは15～20cmが１点，20～25cmが２点，40cmが１点あった。15～25cmの小型，40cm前後の中型の２グループに分けることができそうである。

外面の叩き文様は，壺も含めて木目に直交する平行文が基本であり，内面の当て具文様には一般的な同心円文がほとんどであるが，一部平行文状にみえるものもある。

（6）その他

発掘調査されたが，甕類の口縁部などが確認できていない窯跡をあげる。

奥更谷窯跡　瀬戸内市邑久町，新林（宮嶋）窯跡の東南東約1.2kmに位置し，1974年に東備西播有料道路建設に伴って発掘調査された（葛原1975）。８世紀代のものと推測される。窯体部のみの調査で，出土遺物は少なく，図化できたものは杯類がほとんどで，ほかに壺類，甕類が出土しているが，図化された壺甕類には口縁部がわかるものはない。ただ頸部の大きさから推測すると口径25cm前後のものがあるようである。叩き文様は基本的に木目に直交する平行文で，内面の当て具文様は一部よくわからないものもあるが，基本的に一般的な同心円文である。

東６号窯跡　備前市伊部，備前焼で有名な伊部南大窯の南東側に位置し，2001～2002年に発掘調査された（石井・小西2006）。

邑久窯跡群では唯一の９世紀代の須恵器窯跡である。出土遺物は大多数が杯類で，壺もほとんど出土しておらず，甕は平底状のものの破片が１点しか出土しておらず，内外面ナデ調整のものである。この東６号窯跡は基

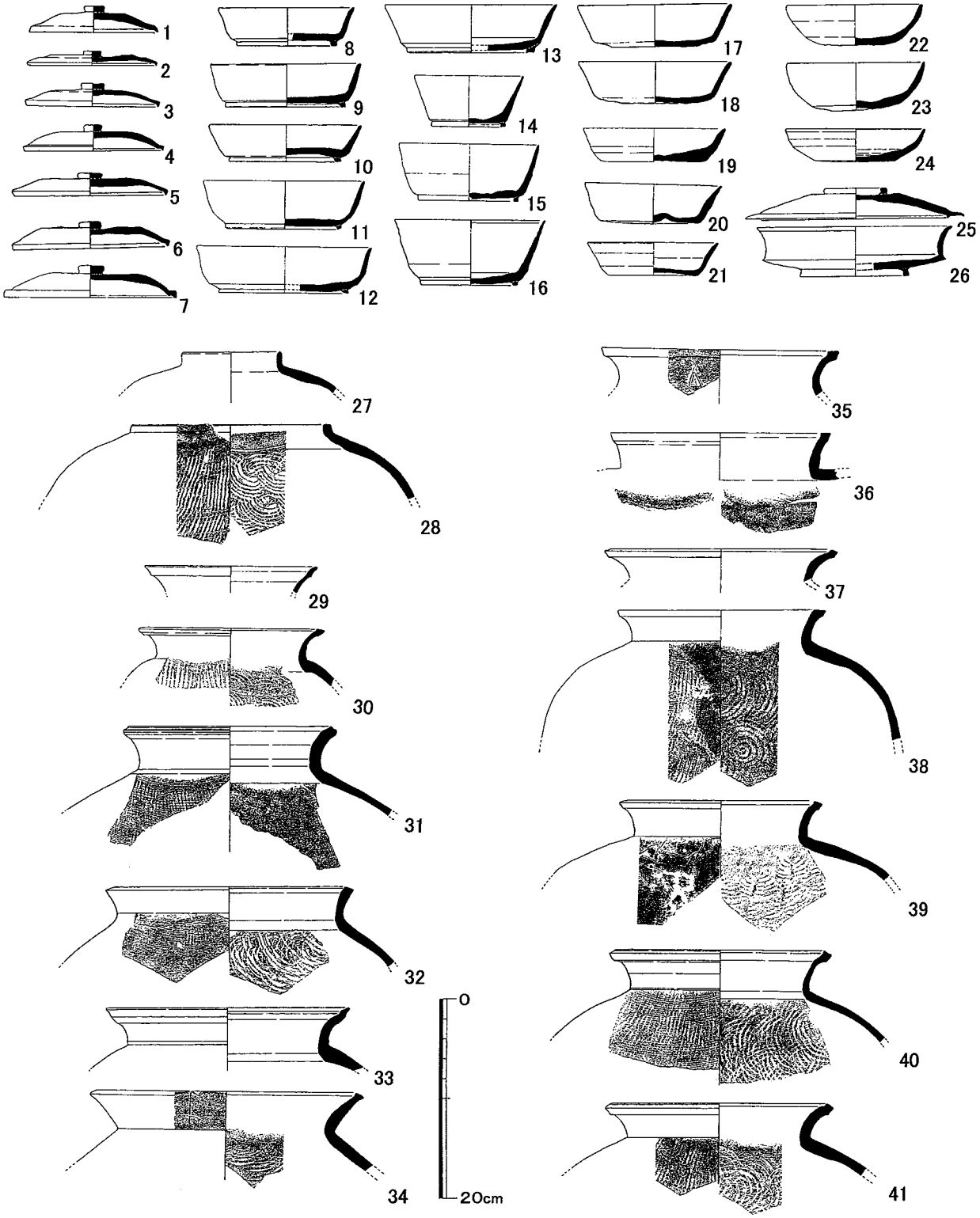

図８　佐山東山窯跡の須恵器（１）(1/6)

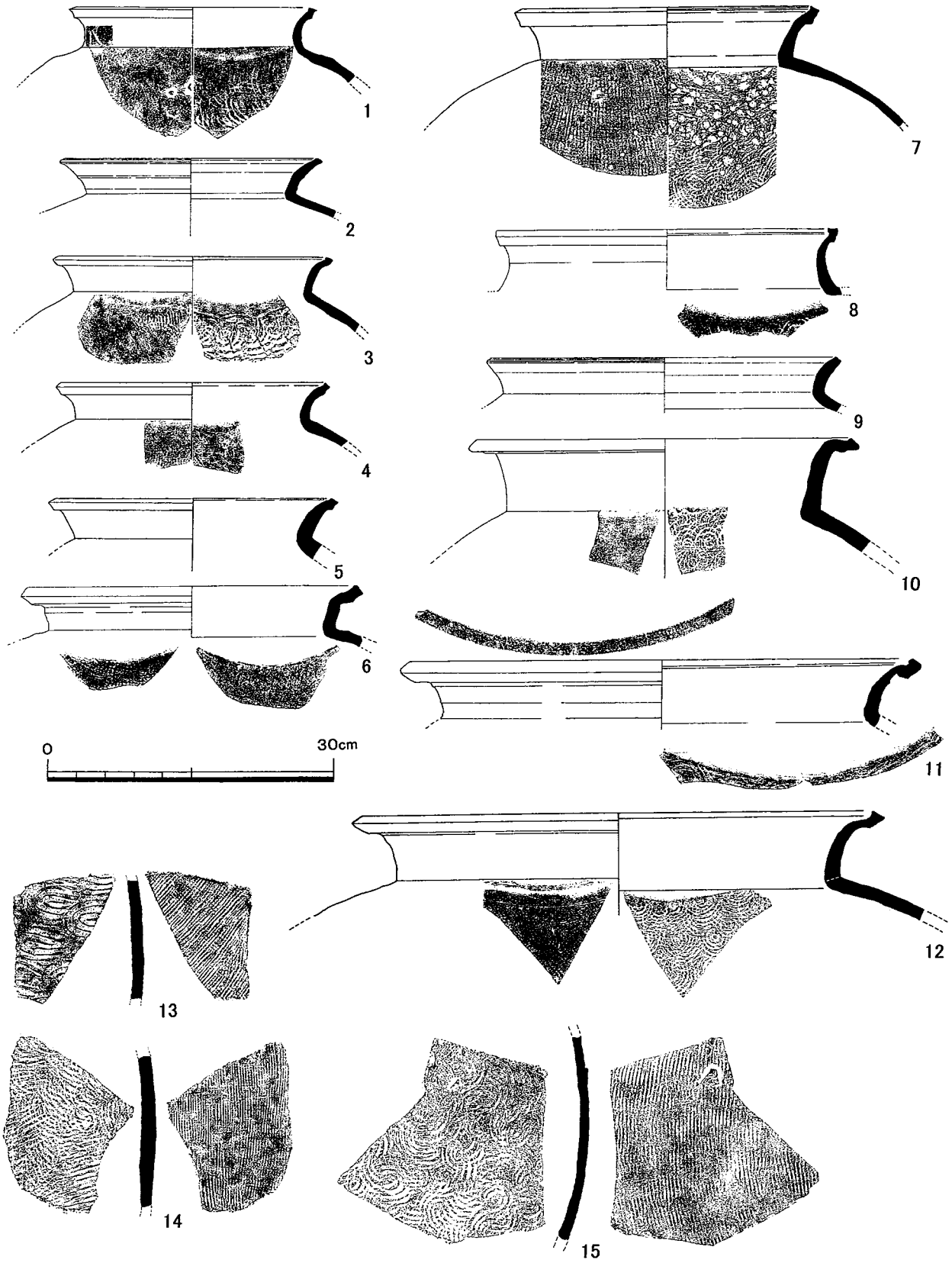

図９　佐山東山窯跡の須恵器（２）（1/6）

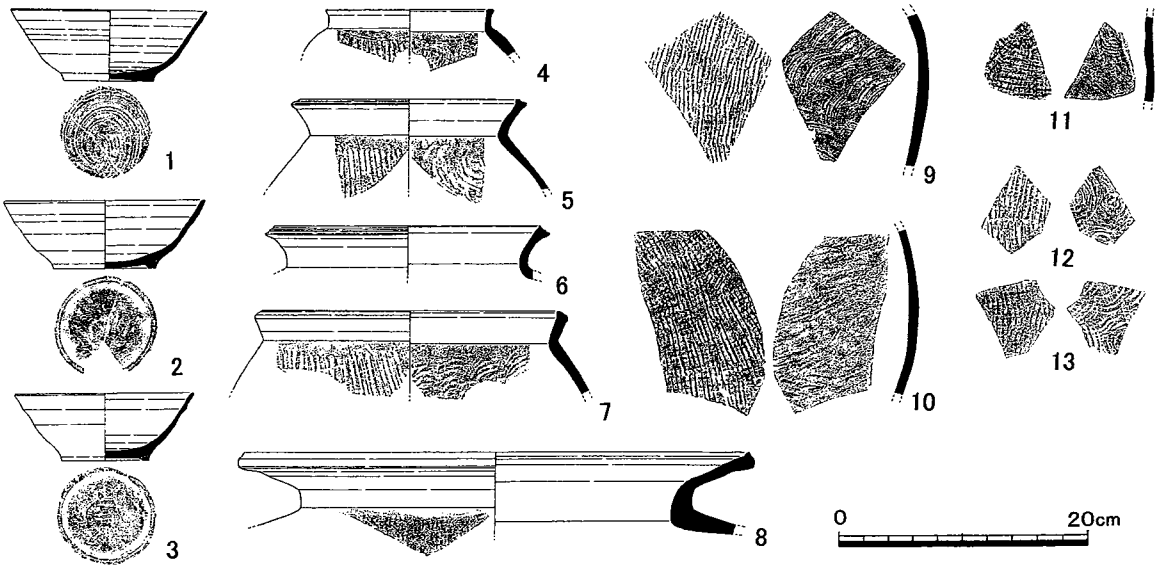

図10　佐山東山奥窯跡の須恵器（1/6）

本的に小物用の窯で，９世紀以前の一般的な叩き調整の甕は焼成されなかった可能性が推測される。

３．検討

（１）口縁部（図11～13）

口縁部形態　口縁部形態は，発掘調査された窯跡資料を図示した図２～10以外にも表面採集資料で異なる形態のものもあるが，ひとまず発掘調査資料を中心に説明していく。

まず，邑久窯跡群最古段階の６世紀中葉前後の木鍋山窯跡では断面が三角形，コの字形のものがある。断面三角形のもの（11－１）はこれ以降のものでは基本的にみられないようであり，この時期をひとまず代表するものと考えておく。和泉陶邑窯のⅡ－２段階のTN５号窯跡資料（11－２）に類例がみられる[4]。

また断面コの字形のもの（11－３）の類例としては，Ⅱ－３段階のTG30－Ⅰ号窯跡にわずかに類似するものがある（11－４，５）が，やや異なっている。陶邑の報告書で捜すと，『陶邑Ⅱ』（（財）大阪文化財センター1980）の栂地区のTG44－Ⅰ号窯跡資料（11－６～10）や７世紀前半まで時期は下がるが，TG64号窯跡資料（11－11～14）に比較的類似したものがある。刊行されている報告書の他地区のものでは類例を見出しえていないので栂地区に多く，陶邑窯跡群のなかに小地域性がみられる可能性があるようである。

発掘調査された資料で木鍋山窯跡に後続するものは，やや空白はあるが，寒風窯跡群の資料である。

１－Ⅲ号窯跡（７世紀初～前半）の上層土坑１出土甕２点の口縁部形態はどちらも頸部と口縁部の厚さがほぼ同じで，端部にやや面をもつものと丸みをもつものがある。頸部はどちらも無文である。１－Ⅱ号窯跡（７世紀前半～中葉頃）では小破片しか出土していないが，口縁部が頸部よりやや厚みをもつものである。１－Ⅰ号窯跡（７世紀末～８世紀初）出土例では頸部と口縁端部の厚みにあまり差がなく，そのまま丸く終わるものと，わずかに厚みをもち，コの字に近いものもある。頸部の厚みがそのまま伸び，端部近くでわずかに内傾するものの外面には２段の櫛描き波状文が沈線とともに描かれたものがある。

２号窯跡（７世紀中葉～８世紀初頃）の甕の口縁部形態は，基本的に頸部と同じ厚さのもの，わずかに肥厚するものの２種があり，口縁端部は丸く収めるものと，面をもちながらも丸く収めるものがある。

３号窯跡（７世紀末～８世紀初頃）では口縁部形態のわかる甕は出土していないが，ほぼ同時期の７世紀末～８世紀初の工房と考えられている竪穴遺構では，頸部を直線的に伸ばし，端部を丸く収めるもの，ゆるく外反しながら口縁端部をやや肥厚させ，側面と上面に幅１cm前後の面をもつ「コの字形」のもの（11－16），頸部を直線的に伸ばし，口縁端部付近をやや尖らせ気味にし，櫛描き波状文を４段飾るものがある。「コの字形」例は佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡の「コの字形」口縁に多少類似している。

新林（宮嶋）窯跡（７世紀前半～８世紀前半）の甕口縁部形態は，頸部の厚みをそのまま，または口縁部外面をやや肥厚させ，端部に平坦面をもつもの，端部がやや丸みをもち内側にわずかにつまんだようなもの，端部を内外に肥厚させ丸みをもつものなどがある。頸部を直線的に伸ばし，そのままの厚さのもの，やや肥厚させたも

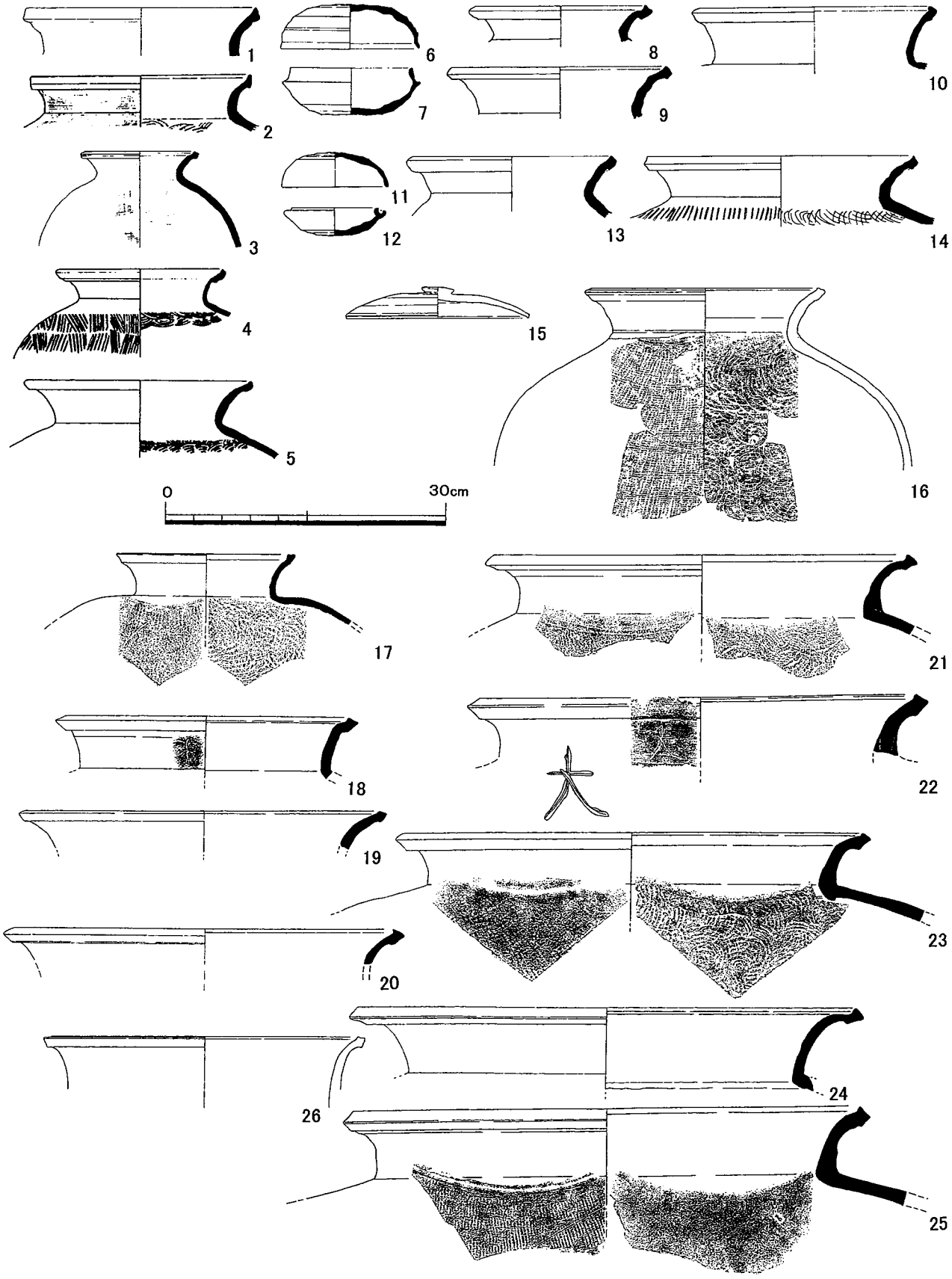

図11　邑久窯跡群の須恵器甕口縁部と関連資料（1）（1/6，22「大」トレースのみ1/3）

1・3：木鍋山窯跡　2：陶邑TN５号窯跡　4・5：陶邑TG30－Ⅰ号窯跡　6～10：陶邑TG44－Ⅰ号窯跡
11～14：陶邑TG64号窯跡　15・16：寒風窯跡群竪穴遺構３　17～25：佐山新池１号窯跡　26：さざらし奥池窯跡

ので口縁端部に面をもつものに櫛描き波状文を施したものがみられる。

佐山新池１号窯跡（８世紀後半）の甕口縁部形態は，これまでのものと異なり，ゆるやかに外反し，端部を肥厚させ，上面と側面に幅１cm前後の平坦面を作った，断面が「コの字形」口縁が多くみられる（図11－17～25)。この「コの字形」口縁は上面の平坦部を内側に少しつまみ出したようなもの（20，21，24，25など）とこのつまみ出しがないもの（19など）があるが，前者が多いようである。またこの「コの字形」口縁が口径の大きさに関わらずみられる。

このほか，口縁端部が基本的に肥厚せず，またはわずかに肥厚してそのまま平坦面を作るもの，丸く終わるもの，口縁端部を外側に少し折り曲げるもの，断面三角形のものなどがわずかずつある。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

佐山東山窯跡（８世紀中葉～後半）の甕口縁部形態は，多少幅はあるが，前述の佐山新池１号窯跡出土例と類似した「コの字形」口縁甕がやはり多くみられる（図12－１～７)。そのほか，ゆるやかに外反し，あまり肥厚せず，口縁端部に平坦面をもつもの，端部側のみ内外に肥厚させ，平坦部をもつものがややみられ，二重口縁風に段を作るものもわずかに出土している。頸部に櫛描き波状文などの文様はみられない。

佐山東山奥窯跡（10世紀）の甕口縁部形態は，基本的にくの字形に折れ曲がり，口縁端部内側，または内外面を少し肥厚させ，面をなすようにしている。佐山東山窯跡や佐山新池１号窯跡に多くみられた「コの字形」口縁はない。頸部に櫛描き波状文などの文様もみられない。

以上，発掘調査された窯跡出土資料によって邑久窯跡群の須恵器甕の口縁部形態をみてきたが，６世紀中葉前後では陶邑窯跡群の同時期のものと基本的に同じ形態の断面三角形を呈したものがみられる。ただ，コの字形のものは同時期の陶邑窯跡群においても地域性があるのか栂地区以外ではあまり類例がないようである。

６世紀後半～８世紀初め頃までのものでは多少幅はあるが，頸部から口縁部にかけてあまり厚みを増さないもの，口縁部外側を少し肥厚させるものが比較的多く，端部は平坦面をもつもの，丸く収めるものがある。そして頸部に波状文などの文様をもつものともたないものがあり，有文のものは比較的少ないようである。

８世紀前半以降になると，佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡で「コの字形」口縁のものが多くなる。この「コの字形」口縁は前述のように木鍋山窯跡で１点出土しているが，それ以後，多少類似するものはあるが，一般的でなく，８世紀前半～後半に多くみられる。佐山地域の特徴である可能性も考えられるが，山を一つ南に越えた同時期の邑久町さざらし奥池窯跡でもまとまってみることができる（11－26)。つまり，８世紀後半頃の邑久窯跡群の甕口縁部形態と考えても良いのかもしれない。

岡山県内の窯跡類例としては，備中地域の倉敷市玉島陶窯跡群中の横内北窯跡群１号窯跡で多少類似したもの（図12－12，13）をみることができる。時期も重なっており，８世紀後半の吉備地域ではこのような「コの字形」口縁甕が生産されていた可能性は推測できる。ただ，頸部の特徴などは異なるようである。

そして，日本列島の須恵器生産の中心地である和泉陶邑窯では前述のように６世紀後半～７世紀前半に同様の「コの字形」口縁はみることができるが，８世紀後半前後の窯跡では確認できない。さらに吉備周辺地域の窯跡においても類似例を探し出せていない。東に隣接する兵庫県加古川市の志方窯跡群のほぼ同時期の中谷４号窯跡において１点比較的似たものを見出した（12－16，森内ほか2000，第24図2404）が，やや孤立する資料のようであり，邑久窯跡群の「コの字形」口縁との関係はよくわからない。

このほか窯跡資料ではないが，大阪府島本町の宇治川と桂川の合流する中州先端部で発見された甕（図12－17，久保2015）の口縁部形態が佐山新池１号窯跡の図11－22，23，佐山東山窯跡の図12－６などと比較的類似しており，叩き文様，当て具文様も違和感はないようである[5]。大きさも口径52.6cm，器高105.0cm，胴径107.8cmで佐山地域の大型甕の大きさと大きな違いはない。胎土分析がなされておらず，邑久窯跡群から運ばれたものであるかどうかはわからないが，もしそうであるならば，瀬戸内海，淀川を通って平城京・長岡京などに運ばれた可能性もあり，極めて興味深い資料である。

また，広島県安芸高田市明官地廃寺出土例も佐山新池１号窯跡の図11－21，24，佐山東山窯跡の図12－７などと比較的類似した口縁部形態をしている（図12－18，小都1985，p.21)。大きさは口径49cm，推定高108cm，胴径100cmで，これも佐山地域資料と大きな違いはない。

これら両者に関しては，口縁部形態が類似しているということのみでの提示であり，胎土分析など今後のさらなる検討が必要であることは明らかである。吉備以外においても８世紀後半代にこのような口縁部形態の甕を生産していた地域がある可能性は十分あり，そのような追求もさらに必要である。

頸部文様（図13）　頸部に文様を飾らないもの，飾るものがあり，その文様は櫛描き波状文と斜線文がある。これらは沈線文との組み合わせが多い。また沈線文のみの場合，ひとまず無文としておく。有文と無文の比率は出していないが，無文のものが多いようである。

櫛描き波状文は，発掘調査した窯跡群では寒風窯跡群１－Ⅱ号窯跡（１），１－Ⅰ号窯跡（２），寒風窯跡群竪穴遺構３（３），新林（宮嶋）窯跡（４～６）でのみ確

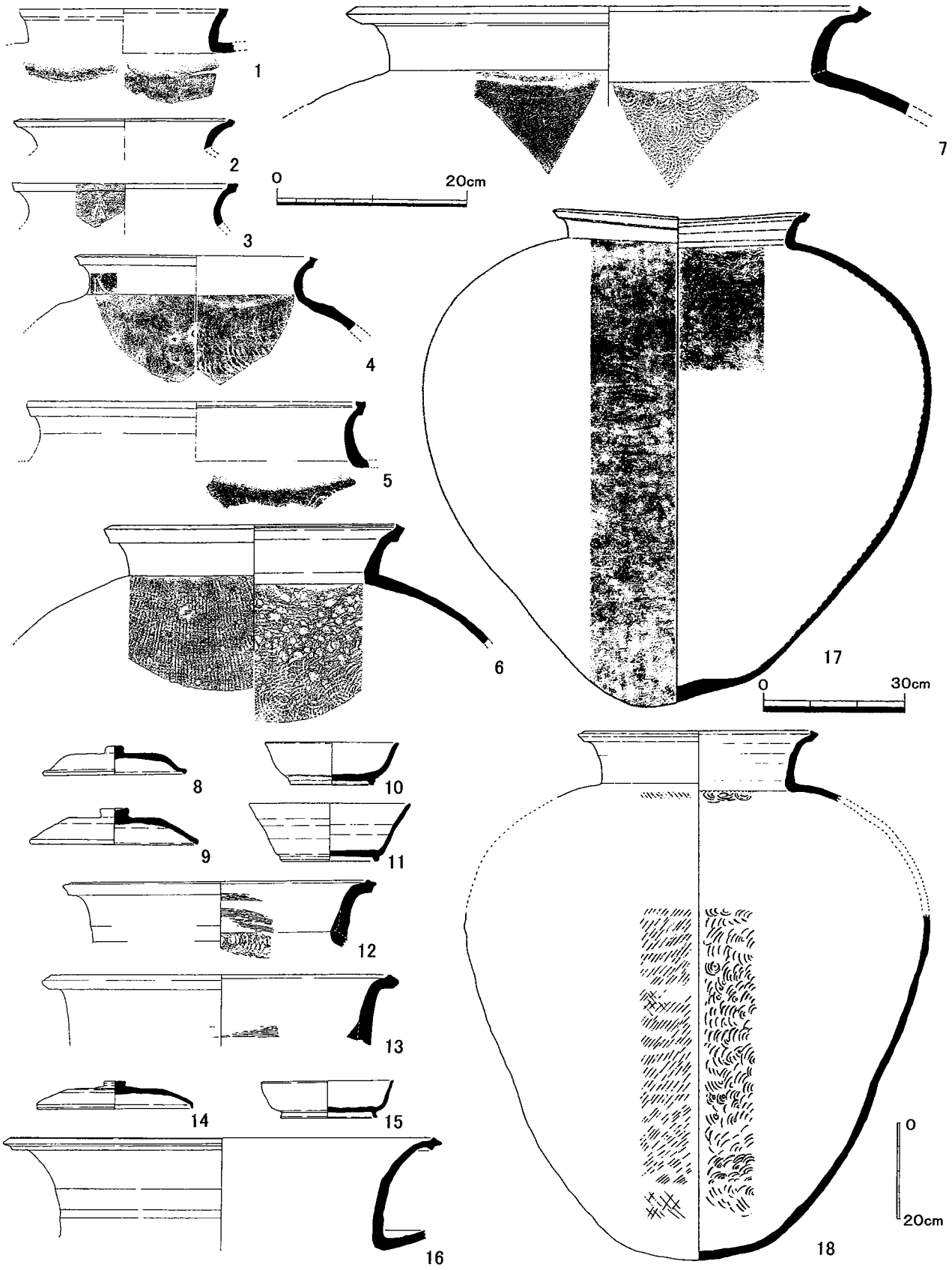

図12　邑久窯跡群の須恵器甕口縁部と関連資料（2）（1～16：1/6，17・18：1/12）

1～7：佐山東山窯跡　8～13：備中横内北窯跡　14～16：播磨中谷4号窯跡　17：摂津淀川中州　18：安芸明官地廃寺

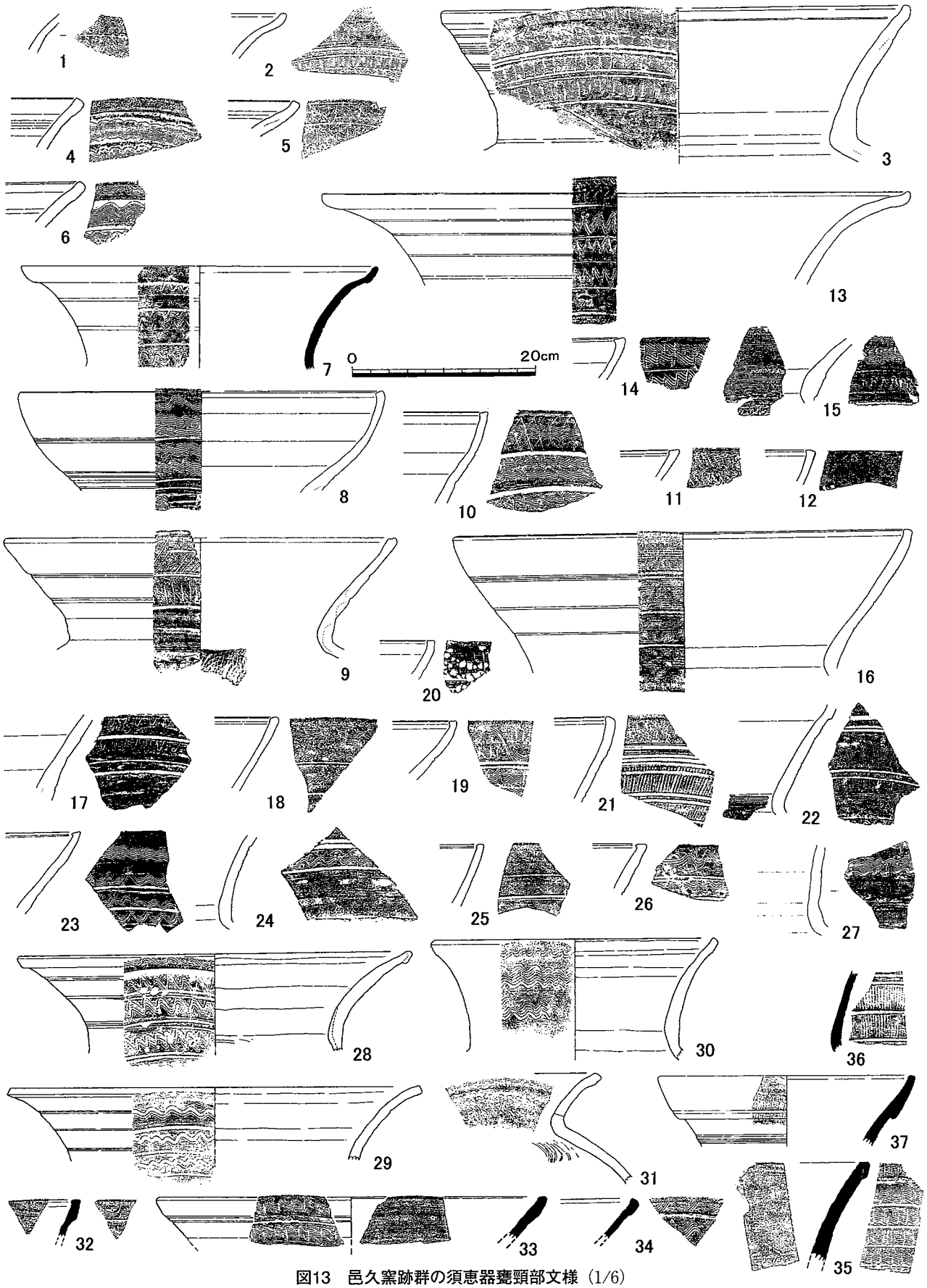

図13　邑久窯跡群の須恵器甕頸部文様（1/6）

１：寒風１－Ⅱ号窯跡　２：寒風１－Ⅰ号窯跡　３：寒風竪穴遺構３　４～６：新林（宮嶋）窯跡　７：五郎ヶ市池窯跡
８～12：烏谷窯跡　13～15：カンニャクバ窯跡　16～22：広高窯跡　23～26：新山２号窯跡　27：三谷窯跡
28～31：土橋窯跡　32：平田窯跡　33～35：かべら窯跡　36：奥池中池窯跡　37：高山北窯跡

認されている。時期は７世紀前半～８世紀初で，口縁部は基本的にあまり厚みをもたないものが多く，やや内彎気味に処理しているものもみられる。波状文の段数は確認できたなかでは４段が最も多いようである。

寒風窯跡群１－Ⅲ号窯跡と２号窯跡，３号窯跡では櫛描き波状文の例は確認されていない。

また，これら以外の佐山新池１号窯跡，佐山東山窯跡群，奥更谷窯跡，東６号窯跡でも頸部文様は確認されていない。前述の比較的多くみられた「コの字形」口縁甕にも施文されていないようであり，口縁部形態と櫛描き波状文などの施文には関連があるのかもしれない。

このほか，発掘調査資料ではない[6]が，櫛描き波状文例は長船町五郎ヶ市池窯跡（７）（６世紀後半～７世紀前半），邑久町烏谷窯跡（８～12）（６世紀末～７世紀前半），カンニャクバ窯跡（13～15）（７世紀前半～８世紀前半），広高窯跡（16～19，21）（６世紀末～７世紀前半），新山２号窯跡（23～26）（６世紀末～７世紀前半），三谷窯跡（27）（８世紀前半），邑久町・牛窓町土橋窯跡（28～31）（７世紀中葉～８世紀初），牛窓町平田窯跡（32）（７世紀中葉～８世紀初），かべら窯跡（33～35）（７～８世紀）などで採集されている。

また，発掘調査例では確認されていないが，斜線文が長船町の高山北窯跡（37）（６世紀末～７世紀初），奥池中池１号窯跡（36）（６世紀末～７世紀前半），邑久町広高窯跡（20，22）で採集されている。

さらに斜線文と櫛描き波状文，両者を描いたものが邑久町烏谷窯跡（10）（６世紀末～７世紀前半），広高窯跡（21）（６世紀末～７世紀前半）で採集されている。

このように甕口縁部の文様としては，櫛描き波状文と斜線文があり，前者が多く，口縁部形態は口縁部をあまり肥厚させないものに多く施文されているようである。現時点では６世紀後半から波状文，そしてやや遅れて斜線文がみられるようになり，８世紀前半頃にはみられなくなるようである。

（２）大きさ

甕の大きさに関しては，窯跡資料であり，全体像がわかるものはほとんどない。小稿では多少復元に幅をもたせながら，口径で検討してみたい。資料は報告書などに掲載されたものである。

木鍋山窯跡では口径が11cm，24cmのものがある。

寒風窯跡群の１－Ⅲ号窯跡では上層土坑出土品であるが，口径が24cm，26cmである。１－Ⅱ号窯跡では口径がわかるものは出土していない。１－Ⅰ号窯跡では口径は16cm１点，20cm１点，22cm１点である。２号窯跡の口径は16cm１点，19cm２点，20cm１点である。３号窯跡では口径がわかるものは出土していない。７世紀末～８世紀初頃の工房と考えられている竪穴遺構３内では17cm１点，19cm１点，22cm１点，24cm１点，50cm１点が出土している。これらをみると，ほとんどが16～26cmで，１点50cmのものがある。

新林（宮嶋）窯跡では，口径16cm１点，17cm２点，19cm２点，20cm２点，21cm１点，25cm１点，26cm１点，32cm１点，41cm１点と12点図示されており，16～21cm，25～32cm，41cmの３グループに分けることができそうである。

佐山新池１号窯跡では，口径18cm１点，19cm１点，22cm１点，23cm１点，28cm１点，30cm２点，31cm１点，37cm２点，40cm１点，42cm１点，46cm２点，48cm１点，49cm３点，50cm３点，51cm１点，53cm１点，54cm１点が図示されている。18～23cm，28～31cm，37～42cm，46～54cmの４グループに分けられそうである。

佐山東山窯跡では，口径16cm１点，17cm１点，18cm２点，19cm１点，20cm２点，21cm１点，22cm３点，23cm１点，24cm２点，26cm２点，27cm１点，28cm２点，30cm１点，34cm２点，36cm１点，39cm１点，52cm１点，53cm１点が図示されており，16～24cmが最も多く，26～30cm，34～39cm，50cm以上の４グループに分けられそうである。

佐山東山奥窯跡では，口径17cm１点，21cm１点，23cm１点，40cm１点が図示されており，17～23cmと40cmの２グループに分けられそうである。

以上の発掘調査資料のデータをまとめると，図14のようになる。口径16～25cmのものが最も多く，途中30cm前後，40cm前後の小グループがあり，50cm前後以上のものがもう一グループあるようである。

九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の甕を検討した岡田裕之は口径，頸部高，頸部文様によって甕を５つに分類している（岡田2008）。ここでは比較のため

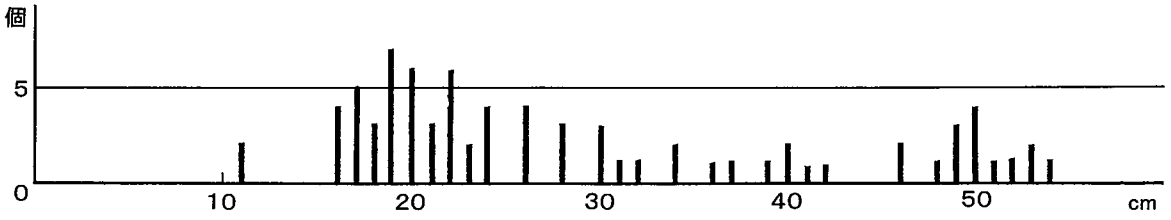

図14　邑久窯跡群の須恵器甕口径

口径だけを取り上げるが，10～17cm，17～30cm，30～42cm，42～53cm，53cm以上に分けている。また，牛頸ハセムシ窯跡群12地区灰原から出土した甕に「大瓶」「和銅六年」（713年）などがヘラ書きされたものがある（中村1989）。２個体口径が復元でき，47.0cmと52.6cmである。

この数値を邑久窯跡群の甕に当てはめると，口径50cm前後以上のものが「大瓶」→「大甕」と考えて良さそうである。つまり邑久窯跡群では比較的多くの口径20cm前後の甕と50cm前後の甕（大甕・大瓶），そしてその間の甕が生産されていたことがわかる。

（３）当て具文様

邑久窯跡群で出土している甕類の叩き文様は基本的に木目に直交する平行文である。まれに木目に平行するものなどがあるが，少ないようである。

当て具文様に関しては，陶邑窯跡群などの初期須恵器では陶製無文当て具や木製無文当て具が使用される（亀田1989）が，５世紀末頃以降には木製の同心円文当て具が一般的に使用されるようになる。

６世紀中葉頃に操業が始まる邑久窯跡群では基本的に木製の同心円文当て具が使用されたと考えられ，内面の当て具文様は同心円文が基本となる。ただ，前述のように一般的な同心円文のほか，車輪文や楕円形文などの特殊な当て具文様もある。

車輪文に関しては，古く横山浩一（1981）が検討を始め，その後地域単位で集成なども行われている（池田1998など）。

小稿ではこれまでの先行研究成果に筆者らが調査し，多様な当て具文様の甕などが出土した佐山新池１号窯跡の例などをあわせ，簡単に整理したい（図15，16）。

今回扱った発掘調査した窯跡において車輪文や特殊な当て具文様が確認されたものは寒風窯跡群の１－Ⅲ号窯跡（15－１～３，星形文，十字文），１－Ⅰ号窯跡（15－４，車輪文），１号窯跡（15－５～７，楕円形文），２号窯跡（15－８～10，星形文，十字文，楕円形文），３号窯跡（15－11，車輪文）がまずあげられる。なお，１－Ⅰ号窯跡には無文の当て具か同心円文スリ消しと考えられるものもある。

次いで，佐山新池１号窯跡（15－17～43）では，十字文が６種以上（13種？），六車輪文（２種以上），星形文（１種），扇形文（１種），放射状文（１種以上），格子文（１種１点），平行文（１種以上），そして無文（１種１点）がみられる。平行文は木目に直交する平行文，木目がはっきりしない平行文（木製，陶製？）もある。このほか平行文と同心円文，平行文と十字形車輪文を一緒に使用したものもある。特殊な文様は車輪文を含め15種以上あり，これだけの多様な当て具文様をもつ甕類を出土した遺跡を筆者は知らない。

佐山東山窯跡（15－44，45）では，十字文（１種），楕円形文（１種）がみられ，キズが入ったもの（16－１，２）もみられる。

今回扱った発掘調査した窯跡のうち，木鍋山窯跡，寒風窯跡群１－Ⅱ号窯跡，新林（宮嶋）窯跡，佐山東山奥窯跡，奥更谷窯跡，東６号窯跡では車輪文や特殊な文様の当て具は使用されていないようで，確認できていない。今後，発見される可能性もあるが，発掘調査された窯跡12基のうち６基で車輪文や特殊文様の当て具文様が確認されていることになる。

これらのほか牛窓町古市村窯跡（16－３，十字文），平田窯跡（16－４，５，十字文，車輪文），邑久町切明窯跡（16－６，車輪文），本庄六池窯跡（16－７，車輪文），工田窯跡群（16－８～13，十字文，車輪文，菊花文，楕円形文，無文），さざらし中池窯跡（16－14，車輪文），さざらし奥池窯跡（16－15，16，十字文，楕円形文），広高窯跡（16－17～21，十字文，車輪文），構谷窯跡（16－22，ヒビ？），佐井田谷窯跡（16－23，星形文），長船町亀ヶ原１号窯跡（16－24，車輪文），桂山林道峠窯跡（16－25，十字文？），青木１号窯跡（16－26，27，車輪文），佐府池上池２号窯跡（16－28～30，車輪文，十字文），五郎ヶ市池窯跡（16－31～34，車輪文，星形文？），亥子田谷窯跡（16－35，十字文），北谷窯跡（16－36，37，十字文），蓮池下池窯跡（16－38，十字文），花尻南窯跡群（16－39～45，車輪文）（池田1998）などが採集されている。

窯跡の数は19基以上であり，発掘調査窯跡が６基であるので，少なくとも25基以上の窯で車輪文などの特殊文様が使用されていることがわかる。

楕円形文に関しては，寒風窯跡群および関連遺跡（寒風窯跡群１号窯跡群灰原，２号窯跡，寒風古墳）で多く出土しているが，２号窯跡で出土したｃタイプと同じグループのものが佐山東山窯跡で出土し，そのほか邑久町工田窯跡群でも採集されている。またさざらし奥池窯跡で別グループの楕円形文が採集されている。

また，無文の当て具痕跡をもつもの，その可能性があるものが佐山新池１号窯跡，寒風窯跡群１－Ⅰ号窯跡で出土し，工田窯跡群で採集されている。無文当て具の使用は日本列島では一般的でなく，朝鮮半島との関わりで理解される可能性が高いと考えている（亀田1989）。

邑久窯跡群では８世紀代の佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡の資料に多孔甑がみられる。当時の陶邑窯跡群では基本的にこのような多孔甑は生産していないようであり，これも朝鮮半島との関わりで理解されるものと考えている（亀田2006ａ，469－470）。無文当て具使用に関してもこの多孔甑と同様に，新たな朝鮮半島からの技術導入（渡来人の移入？）と考えて良いのかもしれな

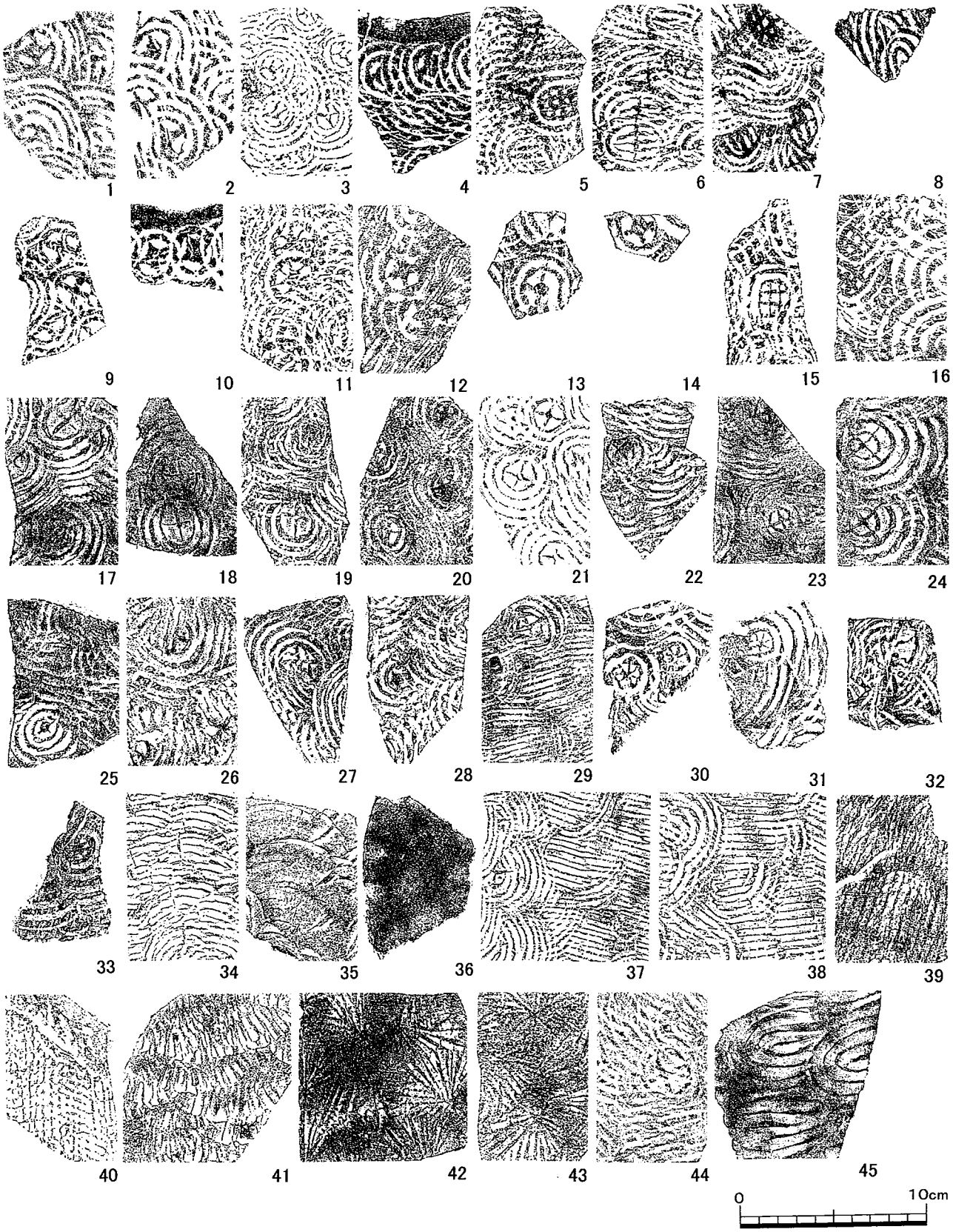

図15　邑久窯跡群の須恵器当て具文様（1）(1/3)

1～3：寒風1－Ⅲ号窯跡　4：寒風1－Ⅰ号窯跡　5～7：寒風1号窯跡灰原　8～10：寒風2号窯跡
11：寒風3号窯跡　12～16：寒風古墳　17～43：佐山新池1号窯跡　44・45：佐山東山窯跡

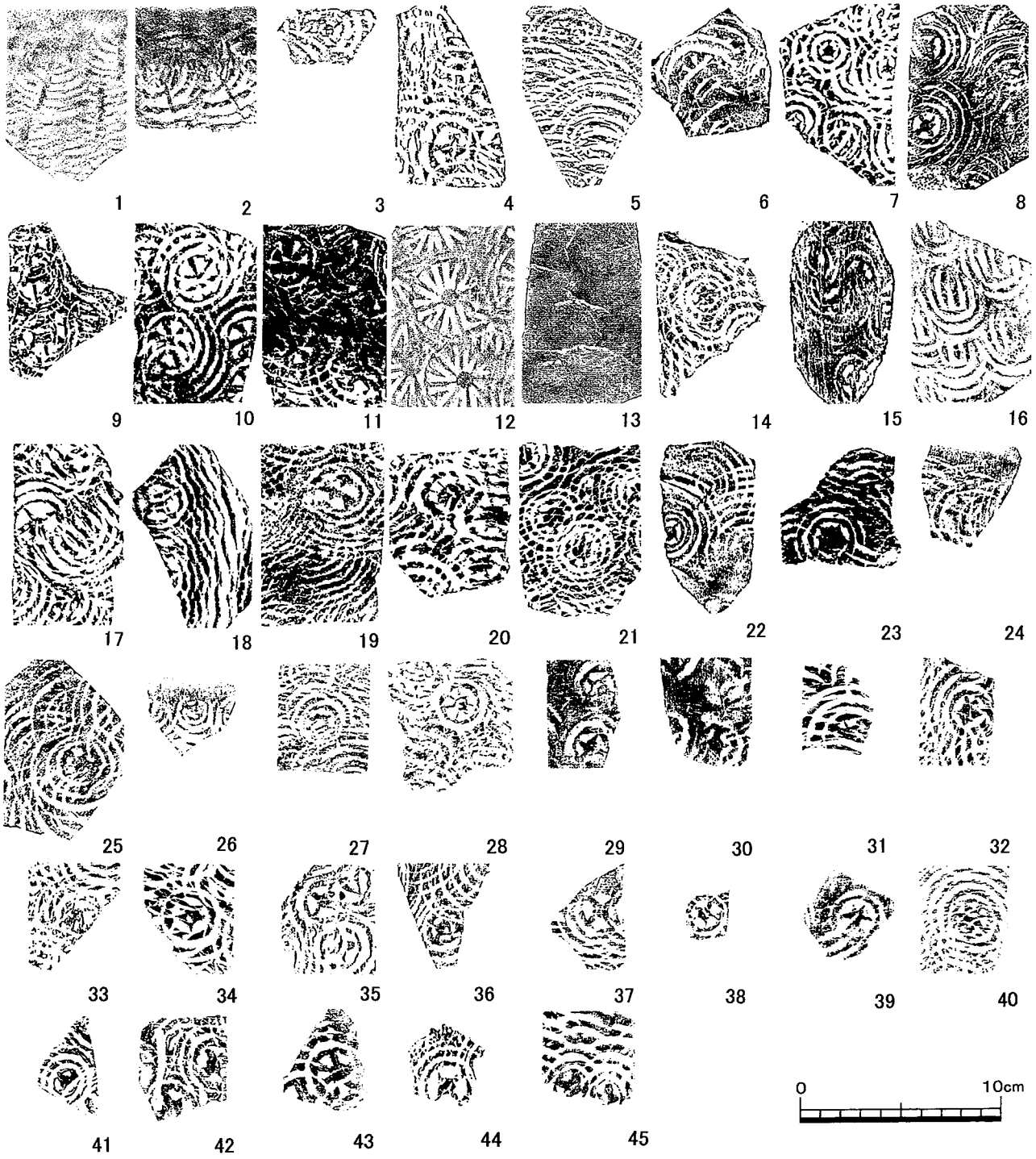

図16　邑久窯跡群の須恵器当て具文様（２）（1/3）

１・２：佐山東山窯跡　３：古市村窯跡　４・５：平田窯跡　６：切明窯跡　７：本庄六池窯跡　８～13：工田窯跡群
14：さざらし中池窯跡　15・16：さざらし奥池窯跡　17～21：広高窯跡　22：構谷窯跡　23：佐井田谷窯跡
24：亀ヶ原１号窯跡　25：桂山林道峠窯跡　26・27：青木１号窯跡　28～30：佐府池上池２号窯跡
31～34：五郎ヶ市池窯跡　35：亥子田谷窯跡　36・37：北谷窯跡　38：蓮池下池窯跡　39～45：花尻南窯跡群

い(7)。

また，佐山新池１号窯跡では一般的な車輪文のほかに，放射状文や扇形文など極めて珍しい当て具文様が使用されている。日本列島のほかの地域においてもまれにみることができる。宮崎県苺田１号窯跡の放射状文・扇形文などである（小田1983）。９世紀頃のものである可能性があり，佐山新池１号窯跡のものとは異なるので関係はわからない。

邑久窯跡群の甕類の内面当て具文様は，種類の多さ，出土窯跡の多さにおいても他地域の窯跡に比べて多い。今後，いろいろな視座から検討すべきと考えている。

４．おわりに

以上のように，中四国最大の須恵器窯跡群である邑久窯跡群の甕類に関する研究は始まったばかりである。口縁部形態においては，日本列島の須恵器生産の中心である陶邑窯跡群と６世紀中頃まではある程度類似しているようであるが，８世紀の「コの字形」口縁甕は同時期の陶邑窯跡群には類例がないようである。周辺の他地域の類例検索は十分ではないが，やはりよくわからない。当時の吉備地域の地域的特徴かもしれない。もしこれが確認できれば，甕の流通に関して，口縁部形態で検討できる可能性が出てくる。

また，櫛描き波状文などの頸部文様に関しても，「コの字形」口縁甕には施文されていないようで，文様と口縁部形態の関係も検討材料となり，工房内のあり方なども推測できるかもしれない。

口径の大きさに関しては，16～25cmのものが最も多く生産され，30cm前後，40cm前後の小グループがあり，そして50cm前後以上のものに一つのグループがあるようである。佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡などの８世紀代の口径50cm前後以上のものに関しては，筑前牛頸窯跡群の研究成果によれば，「大瑶」（大甕）と考えられ，奈良時代最大規模の佐山東山窯跡の窯構造との関わりも含め，当時の大甕生産体制を考える良好な資料となりそうである。

甕類の内面当て具文様に関しては，細かな比較研究はできていないが，少なくとも50種以上の車輪文，楕円形文，そして特殊な扇形文，放射状文などがあり，この多様性は日本列島のなかでもトップクラスと推測される。なぜこのように種類が豊富なのかはわからないが，一つの個性であることは言えよう。またこの文様研究を進めれば，流通関係の研究に寄与できることは間違いないであろう。

さらに数は少ないが，８世紀代の佐山新池１号窯跡や工田窯跡群において無文当て具の痕跡を残すものがある。当時の日本列島ではまれな例であり，朝鮮半島からの新たな技術導入の可能性もあり，多孔甑などとあわせて検討することで，より深い研究ができると思われる。

邑久窯跡群の須恵器甕研究はまさにこれからである。

小稿をなすにあたり，下記の方々にいろいろとお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。敬称は省略させていただきました。
石井啓，伊藤晃，大塚紘司，小田裕樹，尾野善裕，久保直子，倉内岳人，芥子裕美，合田真人，白石純，大谷博志，寺本真一郎，徳澤啓一，長尾早江子，畠山唯達，馬場昌一，平山晃基，福田正継，森内秀造，八木千亜希，横山聖，若松挙史

註

（１）邑久窯跡群に関する代表的な研究・調査成果としては以下のものがある。西川宏・間壁忠彦1970，伊藤晃1987，亀田修一・能美洋介2002，亀田修一・中野雅美2006，牛窓町史編纂委員会1997，長船町史編纂委員会1998，邑久町史編纂委員会2006など。

（２）小稿で，頸部文様は波状文や斜線文を対象とし，沈線文は対象としない。また，甕の口径・胴部径などの大きさを表現する場合，基本的にmmは表現せず，cmで「約」も付けない。窯跡出土例であり，ほとんどが破片で，歪んでいたりするからである。

（３）邑久窯跡群では，おそらく７世紀中葉頃に杯Ｈの蓋と身が上下逆転し，その後，身であった蓋は基本的に使用されず，蓋であった身のみが使用されるようである。この寒風窯跡群では８世紀初頃までこの杯身（杯Ｈの蓋）のみが出土し，８世紀後半に操業していたと考えられる備前市佐山新池１号窯跡や佐山東山窯跡でもそれなりの点数が出土している。

（４）和泉陶邑窯の須恵器に関しては，本来ならば各窯跡の報告書例を例示すべきであるが，小稿では基本的に中村浩2001を参照しながら説明する。

（５）本資料に関しては，森内秀造氏にご教示いただき，資料などをいただいた。記して謝意を表したい。

（６）発掘調査以外の資料に関しては，長船町分は長船町史編纂委員会1998，邑久町分は邑久町史編纂委員会2006，牛窓町分は牛窓町史編纂委員会1997による。以下同様である。

（７）初期須恵器段階での朝鮮半島からの技術導入はある面で当然であるが，６，７世紀以降の新たな技術導入は福岡県牛頸窯跡群などでみることができる（亀田2008）。

参考文献

池田浩1998「車輪文当て具痕のある須恵器」長船町史編纂委員会編『長船町史　史料編（上）』長船町，279-280
石井啓・小西通雄2006『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅱ』備前市埋蔵文化財調査報告７，備前市教育委員会
伊藤晃1974『新林（宮嶋）窯址の調査報告－東備西播有料道路建設に伴う－』邑久町教育委員会

伊藤晃1987「第十一章 窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館，531-588
牛窓町史編纂委員会編1997『牛窓町史　資料編Ⅱ』牛窓町
牛窓町史編纂委員会編2001『牛窓町史　通史編』牛窓町
江見正己1998「34　木鍋山１号窯跡」長船町史編纂委員会編『長船町史　史料編（上)』長船町，237-240
岡田裕之2008「Ⅷ．考察　３．甕」舟山良一・石川健編『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書77，大野城市教育委員会，211-230
岡村勝行ほか1999『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪市文化財協会
邑久町史編纂委員会編2006『邑久町史　考古編』瀬戸内市
長船町史編纂委員会編1998『長船町史　史料編（上)』長船町
長船町史編纂委員会編2001『長船町史　通史編』長船町
小田富士雄1983「延岡市苅田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』26，宮崎県教育委員会
小都隆編1985『明官地廃寺跡試掘調査概要』吉田町教育委員会
亀田修一1989「陶製無文当て具小考－播磨出合窯跡出土例の紹介をかねて－」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ　生産と流通の考古学』273-298
亀田修一2006ａ『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
亀田修一2006ｂ「78　新林（宮嶋）窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市，737-745
亀田修一2008「牛頸窯跡群と渡来人」『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室50周年記念論文集－』上巻，九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会，379-406
亀田修一2017「土師器を須恵器窯で焼くことに関する覚書－備前佐山東山窯跡群資料を対象として－」『半田山地理考古』５，岡山理科大学半田山地理考古学研究会，27-34
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2014『備前邑久窯跡群の研究』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2015『佐山東山窯跡群第４次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2016『佐山東山窯跡群第５次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2017『佐山東山窯跡群第６次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・白石純・徳澤啓一編2018『佐山東山窯跡群第７次発掘調査概報』岡山理科大学考古学研究室
亀田修一・中野雅美2006「第６章　邑久古窯跡群」邑久町史編纂委員会編『邑久町史　考古編』瀬戸内市，695-776
亀田修一・能美洋介2002「窯は動く」岡山理科大学『岡山学』研究会編『備前焼を科学する』シリーズ『岡山学』１，吉備人出版
葛原克人1975『奥更谷古窯址の調査報告－東備西播有料道路建設に伴う－』邑久町教育委員会
久保直子2015「淀川より出土した須恵器甕について」『島本町立歴史文化資料館館報』６，島本町立歴史文化資料館，p.17
（財）大阪文化財センター1980『陶邑Ⅱ』
白石純2001「原始・古代　第３章　古墳の時代－古代国家への道－３　科学が語る須恵器・瓦（鴟尾）の移動」牛窓町史編纂委員会『牛窓町史　通史編』牛窓町，163-173
中村浩1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
中村浩1989『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市教育委員会
中村浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
西川宏・間壁忠彦1970「備前の古窯」近藤義郎・上田正昭編『古代の日本　４　中国・四国』角川書店，293-311
馬場昌一2009「第４章　第５節　３　楕円形当て具痕」『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告１，瀬戸内市教育委員会，182-184
馬場昌一ほか2009『史跡寒風古窯跡群－史跡整備に伴う確認調査－』瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告１，瀬戸内市教育委員会
福本明・鍵谷守秀・小野雅明2007『横内北窯跡群１号・下庄遺跡・上東遺跡』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告12，倉敷市埋蔵文化財センター
舟山良一・石川健編2008『牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書77，大野城市教育委員会
森内秀造ほか2000『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－』兵庫県文化財調査報告203，兵庫県教育委員会
山磨康平編1978『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告27，岡山県教育委員会
横山浩一1981「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要』26，1-27

引用挿図（いずれも一部改変引用）

図２－１～８，図11－１，３：江見1998
図２－９～33，図３，図11－15，16，図13－１～３，図15－１～16：馬場ほか2009
図４－１～34：伊藤1974，亀田2006ｂ，図４－35：岡村ほか1999
図５～７，10，図11－17～25，図15－17～43：亀田ほか2014
図８，９，図12－１～７，図15－44，45，図16－１，２：亀田ほか2014～2018
図11－２，４，５：中村2001，p.100，107
図11－６～10：（財）大阪文化財センター1980，PL.65
図11－11～14：（財）大阪文化財センター1980，PL.85
図11－26，図13－４～６，13～31，図16－６～11，14～23：邑久町史編纂委員会2006
図12－８～13：福本ほか2007，第７，13図
図12－14～16：森内ほか2000，第24図
図12－17：久保2015，p.17
図12－18：小都1985，p.21
図13－７，36，37，図16－24～45：長船町史編纂委員会1998
図13－32～35，16－４，５：牛窓町史編纂委員会1997

連絡先

【亀田修一　〒700-0005　岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学　生物地球学部　考古学研究室】